

残雪の清水ノ頭・綿向山 (鈴鹿)

若野 明

## 新ハイキング選書

- 第4巻 **一等三角点のすべて** 多摩雪雄 編  
改訂2版/上製本/日6判 350頁/定価1800円 一等三角点の知識をこの一冊に収録
- 第6巻 **花の山に行く** 松本雪枝 著  
8刷発売中/上製本/日6判 358頁/定価1835円 山の在りかたの紀行文集
- 第7巻 **山旅素描** 足立真一郎 著  
3刷発売中/上製本/A5変型判/定価1935円 山岳画家足立真一郎の珠玉の画文集
- 第8巻 **旅がらすの山** 富田弘平 著  
3刷発売中/上製本/日6判 368頁/定価1835円 内容豊かな紀行文50編を収めた
- 第9巻 **一等三角点の名山100** 安藤正義/市川静子/多摩雪雄  
/富田弘平/松本雪枝 共著  
3刷発売中/B6判 336頁/定価1832円 一等三角点100山の紀行・案内文集
- 第13巻 **甲斐の山山** 小林経雄 著  
改訂2版発売中/日6判 360頁/定価1800円 山梨県の山と峰を精選した事典的な書
- 第14巻 **百歳までの山登り** 富田弘平 著  
2刷発売中/上製本/日6判 360頁/定価1835円 読者豊富な著者の紀行と随想集
- 第15巻 **日本300名山ガイド(東日本編)** 市川静子/岡田敏夫/岡部紀正  
/川越はじめ/廣澤和彦 共著  
3版発売中/A5判 320頁/定価1900円 新ハイキングの精鋭5氏実地調査のガイド
- 第16巻 **日本300名山ガイド(西日本編)** 市川静子/岡田敏夫/岡部紀正  
/川越はじめ/廣澤和彦 共著  
8刷発売中/A5判 320頁/定価1800円 地図・写真・コースタイム入りガイドブック
- 第17巻 **城跡ハイキング** 中山権四郎 著  
2刷日6判 354頁/定価1680円 歴史をたぐる城跡ハイキング。紀行と案内の書
- 第18巻 **一等三角点の名山と秘境** 安藤正義/多摩雪雄/富田弘平  
/松本雪枝 共著  
2刷A5判 340頁/定価1800円 一等三角点の山100山の登山コースを紹介
- 第19巻 **山との出会い** 富田弘平 編  
日6判 320頁/定価1800円 山の創想集。35名が執筆の読物
- 第20巻 **一等三角点の山々** 山口ゆき子/横山隆/高柳生雄  
/川越はじめ/廣村美輝 共著  
A5判 310頁/定価1800円 第9、18巻の山と重複しない80山の登山コースを紹介
- 第21巻 **中央線の山を歩く** 藤井寿夫 著  
A5判 286頁/定価1600円 あまり歩かれていない中央線の山107コースの紀行と案内

発行所 **新ハイキング社**

〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13  
電話/Fax 03-3815-8110  
振替 00130 9146816

●価格はすべて消費税込みです ●振替でのご注文は送料当社負担



梅 (遠分梅林)

『お元気ですか？  
あなたが旅立たれてから  
二度目の春を迎えました  
今、満開です……』

青く澄み切った空に  
薄桃色の花が鮮やかに映えて  
ひらひらと舞い落ちていく  
舞い散るひとひらに姿を変えて  
風と追いかけっこして  
あなたの襟えりにのっかっていたい  
そっと桜の幹こゝろに触れる  
あつと鮮やかに蘇よみがえってくる  
強烈な思慕の念が胸を焦がす  
春の柔らかな風が吹き抜け  
無数の花びらが空に舞い散った

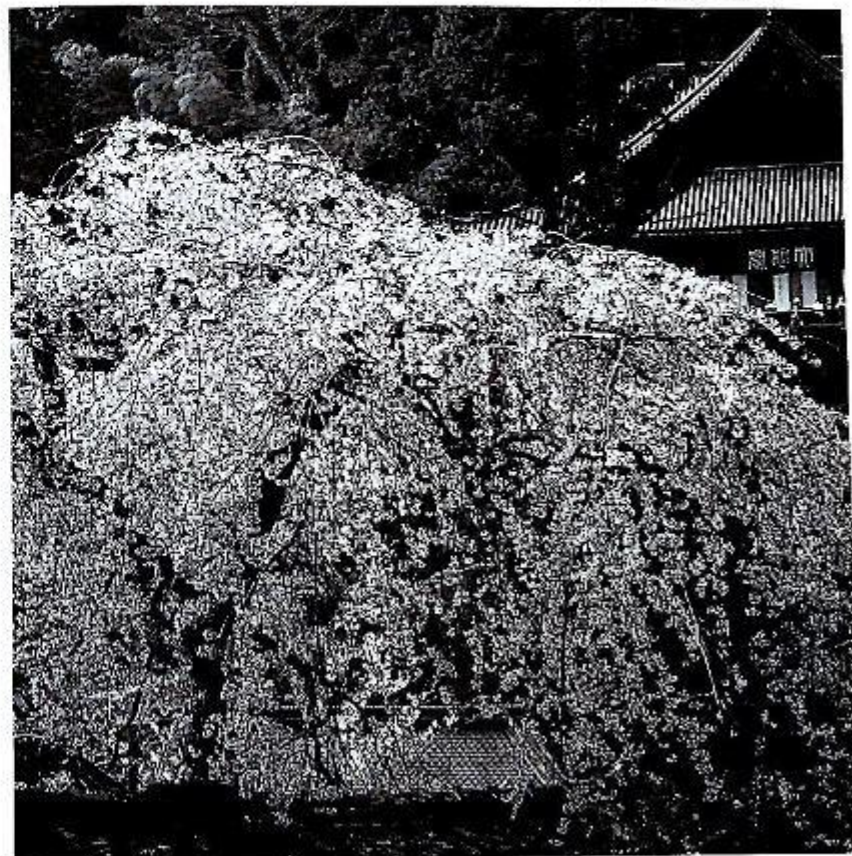


白梅 (二月堂付近)

Photo essay

# 花の舞

題字 中田 蘭石  
撮影 山井 収  
文 松永 恵一



枝垂桜 (長谷寺)

季節の



ニリンソウ



山桜



春の堡 (八幡町)

実景

陽春

撮影 武市通治



コブシ (西吉野村)



フキノトウ



カタクリ



イワウチワ

陽春の花 四題

中川光郎



イカリソウ



フクジュソウ

テクアツルート(河内長野市)の春 -延命寺への道にて-

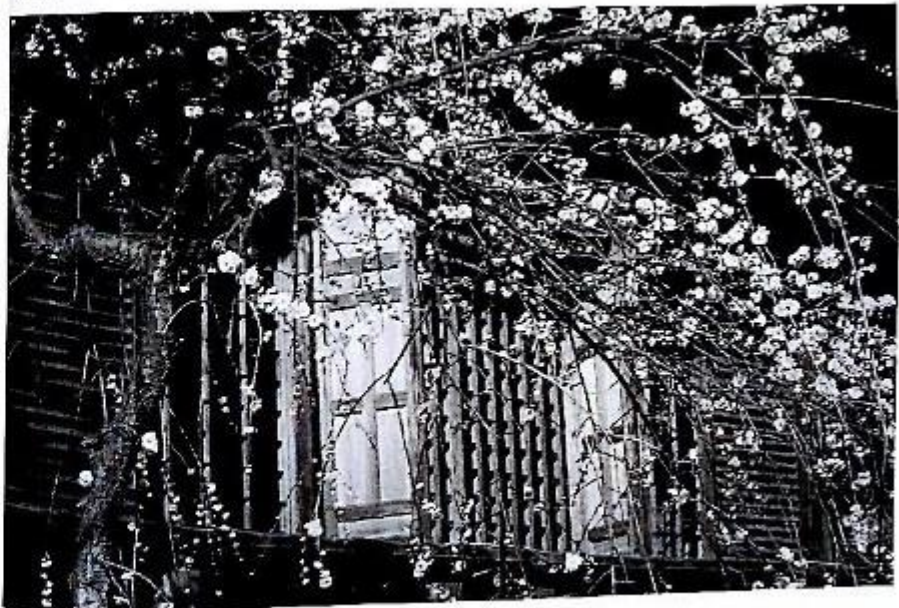
奥田 英一郎



山里のサクラ



煙出しとボケ



観心寺のウメ

新刊代々 関西の山  
1990年3・4月 第51号

●目次

表紙：松田敏男「早春の農鳥岳」(南アルプス)

●作者プロフィール ●1949年、長野市生まれ。京都市立芸術大学卒。1987年より山岳雑誌、  
山岳雑誌編集多岐関係。(昭和47年産経、南アルプス山岳小報、東京キョウリ-一百号、他)  
田代山と野に親しむ会代表、日本山岳会会員、一等三角点登山会会員

記事	著者	頁
● 花の舞……… 撮影	由井 収	文 塚永 薫
● 季節の実景(陽春)「コブシ」他………	武市 通治	4 2
● 岩野 明 中川光郎 奥田英一郎		
● 願想(山のエッセイ)		
● 二本ボソの山頂にて(山岳固定)	高田 榮久	14
● 前鬼のゴローさんと五鬼助義价さん	奥田英一郎	11
● 雨でも山を歩くのか	平 一郎	10
● 杉峠から鏡子ヶ口峠迄(給養)	尾家 建生	22
● 千秋峰から拾球(巻頭)	金谷 昭	19
● 大和三山(下) 香久山から臥せ山(取巻)	木村 太郎	16
● 運載 日本登山行 番外編(補遺)		
● 武奈ヶ嶽(東北)	淡野 孝一	26
● 里沙門岳(東北)	松田 敏男	28
● 運載 三角点を訪ねて(三岳山八丹夜)	磯見 守康	32
● 運載 比良を歩く(前編) 比良から武奈ヶ嶽	磯部 純	36
● 運載 比良を歩く(後編) 比良から武奈ヶ嶽	藤夫 康夫	33
● 一等三角点峰(5000以上) 648 座完全登の記録(第18回)		
● 海上の森4「大正池」………	坂井 久光	43
● 額井岳(大船宮)・戒場山登山	山口 淳有	46
● へ山のレポート)日本一低い富士山	中村 敏文	48
● 文学歴史探訪ハイイク(一) 磯ノ浦から淡嶋神社へ	生駒 登隆	52
● 松永 薫		
● 杉本 高		
● 櫻林次盛一		
● 藤山 誠峰		
● 西尾 芳一		
● 柴田 昭彦		
● 64 62 60 58 56		
● 52 51 48 46 43		
● 39 36 32 28 26		
● 22 19 16		
● 14 11 10		
● 68		
● 66		
● 60		
● 50		
● 98		
● 92		

沿線ハイキングガイド…………… 68

バス時刻表(学生)…………… 90

編後記・広告案内…………… 98

● 巻頭言

ハイキングから本格的な山登りまで、自然のなかを歩くことは、歩く人によって様々な形をとりまします。過去の実績や経験から個人が培ってきた技術、またはその人の持っている自然やものに対する感受性によって違ってくる。何に感じ何に興味を抱いているかというところで、ほぼ決まってしまうことが多いようです。

私たちのまわりには山の会・自然観察会・歩こう会・自然観察会・歴史や史跡の散歩会など、たくさんあって、その会にはまた独自の特色があります。山岳・形態などはまちまちです。このことは山歩きはかくあるべしなどと決めつけられない幅広いものだと考えます。それだけ自然は私たちに多くの心の糧を与えてくれているということにもなります。

新ハイキングはこのようなことでひとつに決めつけずに、リーダーによってそれぞれの特長を發揮してもらい、形態の違う山歩きを實踐しています。また会員の皆様に十分満足してもらっているとは思いませんが、自分にあつた計画を逸んで歩いてください。

新ハイキング関西(代表者) 村田 智彦



克



克

### 随想 (山のエッセイ)

終わったのである。終わりになって「そもそもこの山名の由来は、一と帆ねられた。即座に、曾爾村の名士だった故橋木重吉先生の説を思い出して、先生談を話してみた。「山上に目印として、昔二本のホウソウの木があったから」。そして「漢字に朴の字を当てホクと読むが、お隣ではバクさんの姓が多い」と(漢字八林)は、私の思い違いでホオと読み、飛騨の朴葉味噌は有名。大きな葉が特徴で、モクレン科。対してホウソウは、ブナ科、まったく別だ。森書にはハハソともあり、コナラ八小輪が一般的。何のことはない、昔は飛騨き用材。いまは雑草原木、子ども用の頃からなじんでいるドンダリが生る木のことであり、訂正を入れる。

ついでのこと、二本ボソヤマとは言わず、山をつけない。そして、曾爾側では二本ボソ、裏面の太郎生側では同じボソクを鶴の口と呼ぶ」と総括をし

た。質問はさらに「二本ボソを日本ボソと一部の道徳にあるが、それは「思案の外なり」と否定しておいた。

眺望高麗、会話が弾んであっという間に過ぎた山行も、早や日暮れどき。秋の日のつるべ落としは怖いぞ、と機を飛ばしながら、十の場峠越えて下山したが、途中の辻に、地元が立てた丸左・くろも日本ボソと書かれた道標を見る。何をか言わんやである。

### 前鬼のゴローさんと五鬼助義价さん

奥田 英一郎

滝の写真を撮るという知人に同行して、吉野大滝の端の流から、上北山村前鬼川の不動三重の滝へ出かける。途中、「古事記」に出てくる井水龍神の地と伝えられる井光に立寄りたりして、前鬼口に着いたのは昼前になった。

いつもは前鬼林道中程の大滝前から、堂々と落下するみことな不動ノ滝を遠望するのだが、この日は峡谷沿いに歩いて滝を間近に眺めてみようということなので、とりあえず昼食をと、林道入口にある食堂に入る。

ゴローさんも時々、立ち寄った店である。「もうじくなられて15年にもなるでしょうか……」と言う、おかみさんの話をき

### 二本ボソの山頂にて 山座同定

高田 英久

思いがけない依頼が入ったおかげで、昨年(11月23日)の眞智尊山(1038m)のすぐ西の峰、二本ボソ(996m)の頂上にて心ゆくまで山座同定を楽しむ機会が得られた。

二本ボソでつべんの岩上から眺望できる山々のうち、鏡岳・兜岳・屏風岩・高見山・大台ヶ原・三峰山・岳の洞・扇ヶ岳・青山高原など、どれがどれと知っておきたい」というのが、先方の大まかな要望であった。

約束した勤労感謝の日当日は、前日までずっと続いていた小春日和とうとう変わって、早朝からうとうといあいにくの空模様であった。しかし意外に山座同定のための視界は良好。近く

の山の濃い藍色は遠くなるにつれ薄青くなり、谷間に白い雲を従えて果ては霧が雲か。約40、近くも離れている最遠の大合ヶ原までもが立ち昇る秋霧に見え隠れしながら確認できたのは、晴れた日の朝よりもむしろラッキー。

あと、龜山古光山の稜線に続くさらなる奥の高見山と、曾爾三山の屏風岩・扇ヶ岳は、見る方向の違いからか、ガイドブックでよくご存知らしき山容とは一味も二味も異なる実地だとか。身ぶり手ぶりの説明で、ようやく山名と山姿が一致し、理解してもらえた。

昔ばなしに、正印から眺めた至捨の山をサイドから望むとき、往々にしてただの山に思えて、興奮めとの例に近いかと。

最後に青山高原。これは虚を衝かれた感で、ちょっと戸惑った。過去幾たびかこの頂に立つも、ついぞ、青山は何処? な

どと、考えたことはなかったからである。北の方角から北東へ望むするも、布を引くに似たそれらしい山脈は見当たらない。ただ、海曇で削いたような稜線は東西に幾重にもあるが、とても東海自然歩道が走る布引山脈とは思えなかった。

それでも足場を要すれば、あるいはひよとしてと、わずかに歩み寄る。すると何たることか、青山高原の東縁にあたる笠取山(928m)が眞智尊山パットレスの右に顔を出したではないか。山の上には、印象的なゴマ粒大のレーグードームもハッキリ見え、まきれもない。

一同、思わず歓声をあげた。感しくなって、通りすがりのハイカーにも、あそこ、そこだよと連呼していた。結論として、高原そのものは見えないが、26の龍淵を越えて東端の笠取山のみ遠望できることが確認さ



克



克

### 随想 (山のエッセイ)

く親しまれ、驚われてきた人だ。それだけに、長い歴史を背負ってきた人の死は、大峰の歴史にとって一つの時代が終わったような寂しさを覚える。

「ゴローさんは、目がとってまきれいでした。食堂のおかみさんの口調はその面影を想ふようだった。

大自然のなかに育ち生きた人のまなざしは、確かに澄んで優しかった。飾らない人柄で、特に愛想を言うわけではなかったが、質朴で親切であった。

生前、私は前鬼川を遊った時、三重ノ滝をふり仰ぎ、朽ちた横道を踏んで宿坊にたどり着いたことがあったが、下半身の濡れているのを見るや、彼はすぐさま風呂を沸かしてくれた。

晩年は留守がちだった。病で大退院を繰り返していたようである。弥山から徒歩して前鬼におりてきた時も、宿坊は厳しく閉ざされていたが、すぐ横に大

たひとり、他人のように暮らしている人がいる」ということで、早速前鬼口から3時間余を歩いて訪ねた。

くだんの不動七重の滝を感慨深く眺めながら、暗い葉掘りのトンネルを抜けると、間もなく前方に明るく開けた小盆地が現れた。林道の切れたところからさらに山道をたどると、古い石垣の台地上に蒼古とした宿坊があった。

ぐるりを山に囲まれた仙境である。すでに暮本坊はなく、ゴローさんひとりが住む小僧坊があった。

南向きの縁側に腰かけて話を聞いた。こんな山奥にひとり寂しくはないのかと思つて訊ねると、「子どもの頃からずっとここに居るから、そんなこと思つたことはない」と言う。小学校は村里の親戚から通っていたようである。「前鬼口から歩いて来た」と言う、この下か

きな布同部屋があり、いつも開放されていたのがありがたかった。

「前鬼の人は代々墓神は建てないようですよ」と、食堂のおかみさんは話して話してくれた。そう言えば、いつか池田川を廻行した時、谷中で露宿して小池ノ宿跡を経て、大峰主の石楠花岳から東陸にのびる支線を越えて、直下に見える宿坊をめざして前鬼におりた。

宿坊手前の薄暗い繁みのなかに何体かの書むした石仏と共に、自然石が点在していた所があった。そこがたぶん墓だったのだらう。ゴローさんも今はそこに安らかに眠っているのだろうか。

絶滅したと言われるニホンオオカミについて「自分は見たことがないので、いるとは言えない。しかし、いないとも言えない」として、「あるとき、飼っていた羊が異様におびえたこと



ら来るのではなく、山からおりてきた人が泊まる処よ！山からおりてくるか、何を食べてもおいしくないかな」と言う。

こんな山奥だから夕食に何が出されるのかと、ちょっと気になったが、その夜は、近くの竹林から採ってきた笹の天ぷらをご馳走になった。

前鬼のゴローさん、本名は五鬼助義介。大峰修験道の開祖である彦八角(行者)の隨身と伝えられる前鬼と後鬼。その前鬼がこの地に住みついて行者の残した法を受け継ぎ、いつしかそのまま地名となったとか。平安中期以来、千年を超える間、連綿と続いていた宿坊のうち、現存に残っていたのが小僧坊。その五代坊がゴローさんだと聞いた。亡くなったのは1984年。

生涯独身であった。寂しい旅立ちである。修験道にかかわる人たちにとってはもちろんのこと、大峰を愛する登山者たちにも深

く来た」と言う、この下か

があった。あんなに怖がるのは普通では考えられない」と話してくれたのは、ゴローさんだったと思う。子どもの頃の話だったのだろうか。

「今も、時々ゴローさんのことを懐かしがって話していかれるお客さんがおられるのですよ」と、おかみさんはしみじみとした面持ちで話してくれた。



克



克

### 随想 (山のエッセイ)

#### 雨でも山を歩くのか

平 一郎

冒頭からたいへん失礼な話だが、岩橋元郎氏やみなみらんぼう氏は、本当に山のプロなのであるかと思つた。

みなみらんぼう著「ちよっと山へ行ってきました」(リヨン社刊)を読んで感じたことである。

私は三十数年前、奥穂高岳から槍ヶ岳への縦線縦走路で雨に濡れられて、凍死寸前であつたが、奇跡の生還を遂げた。以来、山での雨の恐ろしさを身にしみて感じている。その後、雨に遭うようなへまを一度もしてかしたことがない。

ところが、みなみ氏のエッセイを読むと、両氏は雨に遭うことが多い。

ところで、まったく唐突だが、山歩き以外のもうひとつの私の

興味は、読書である。とりわけ歴史小説を愛読している。

話題が歴史に転じるが、永禄二年(1560)織田信長は、一か八かの大勝負をした。長攻し、今川義元との戦いである。

信長は天下統一に向けて数多くの戦をしたが、勝つ見込みのない戦いは、生運でたった一度しかしていない。史上名高い細狭間の合戦だけである。

この時ばかりはさすがの信長も、勝てる見込みがないままに奇襲作戦を敢行した。その結果として奇跡的に勝つことができた。それ以後、彼は絶対に勝つ見込みのある戦いしかしていない。奇跡は一度しか起こらないと彼は信じていた。

それでも、見込み違いで負けたこともある。越前の朝倉勢を攻めていた時に、淡江長政の反逆によって、信長は扶み撃ちに遭い、単騎同然で命からがら京

へ逃げ帰つた。

どんなに緻密な作戦を立てても、絶対的な勝算があつても、予期しない出来事によって見込み違いが生じることがあるが、最悪の事態を回避できたのは信長の素早い撤退の決断によるものである。

山歩きのことに戻ろう。昔は、悪天候が予想される時には、山を歩かないのが常識であつた。

天気図を分析して気象の変化を予知し、危険のないことが見込まれる場合に出発するのが、山歩きの大原則であつた。

しかしどんなに緻密な気象予測をしていても、予期せぬ急変もある。最近流行っている高性能の非常装備が、そんな場合に威力を発揮することになる。

非常装備は万一の予期せぬ急変に対応するものであつて、出発の時から雨具を着て山を歩くのは無謀・暴挙としか考えやうがない。繰り返すようだが、や

はり彼らはおかしいということになる。

みなみ氏のエッセイのなかでは、雨中でビニールの雨具を着ている人がいて、難渋している様子が描かれている。みなみ氏は雨具購入の際に、岩橋氏から「生命とりになりかねないから、一番高価なのを買いなさい!」という強いアドバイスを受け、みなみ氏はその意見に従ってよかつたと感謝している。

しかし問題点は、どんな素材の雨具を着ていたかではなく、雨の山中を歩いてしたことそのものである。

ビニール雨具を着ていた人は、おそらく初心者かそれに近い人も知れないので、雨に降られるのは仕方がないと思う。一方、その時に雨中を歩いていた岩橋氏はプロないしベテランの登山家である。

彼は山歩きに必要な常識と、予知能力や決断力といった能力

をもっているのだろうか。

さらにみなみ氏は、そのような岩橋氏の失敗を隠そうともせず、堂々と書物のなかで発表して、岩橋氏の恥の上塗りのようなことをしている。

これが初心者に対する教育的な意味での失敗談や告白であれど、ばは認できないこともないが、みなみ氏はごく普通に平然と、しかも感謝をしながら公表しているのである。

それとも、最近ではゴアテックスやマイクロテックスなど新素材の開発によって、雨具の性能が発達して、雨天でも山歩きをすることが当たり前のことに変わったしまったのだろうか。悪天候でも山歩きをするのが常識になつてしまったのだろうか。

とすると、岩橋氏やみなみ氏ではなく、おかしいのは、山歩きを再開して浦島太郎のようになっている私のほうである。

もっとも、浦島太郎の「丹波

篠山の義兄が農作業で着古したゴム合羽」と山仲間から嘲笑されて雨具では、雨中の山歩きはできそうにないことは分かっているが、そのことは別の問題である。

それでも浦島太郎は、「悪天候の日は山歩きをしてはいけない」という大昔の鉄則を後生大事に固執している。いまだに三十年間の時差ほけから立ち直れていないようである。このかたくなな態度には、われながらあきれ果てている。

浦島太郎の古い山歩きの技術や考え方は、変化の激しい現代に対応しきれないことが多過ぎるようである。



# 杉峠から銚子ヶ口縦走

鈴鹿

尾家建生

イブネから銚子へ



鈴鹿に秘境と言われている山域がある。近江側の佐目子谷を中心に西のフジケリ谷、東の神崎川と南の雨乞岳の山域に囲まれた山域である。

歴史を遡るならば、かつては佐目子谷には数多くの炭焼き窯があった。フジケリ谷には鉱山や街道があり、また、神崎川の支沢にはお金明神のような村人の信仰の地があった。秘境と言うよりもむしろ人々の生活と密接な関係にある地であったが、かつての暮らしが失われ、昔からの集落が永源寺ダムの底に消え、もはや何十年も訪れる人のまれな現代ではやはり秘境と言ってよいだろう。

この知られざる秘境も一部の登山者に

語り継がれ、歩かれている。私もまた先人に導かれ、その山域に足を踏み入れ、魅了された者のひとりである。そしてその秘境の南の杉峠と北の銚子ヶ口の間を縦断することが目標となった。

山行の時期を3月に選んだのは、背丈を超えるブッシュが残雪に埋まっているだろうという期待からだ。99年3月21日、低気圧が西日本に近づくなか、永源寺からタクシーで甲津畑を通って杉峠への登山口に降り立った。メンバーは男3、女1の4人である。昨日降雪があり、山は雪化粧をしている。冬の気圧配置になるとの予報通り、出発の身仕度をしている間にも雨がぱらつき始めた。この

一週間の異常な高温で中腹の残雪はあらかた消え、谷には雪融けの奔流がほとぼりしている。向山鉱山跡に来ると右手の沢側に大流が見えた。雨乞岳から流れ落ちている沢で10m以上の高さはあろう。冬以外は樹林にさえぎられて見ることができない、いわば幻の滝だ。

杉峠の手前で下山する単独行の男性とすれ違った。ガスが出てきたので杉峠で

引き返したとのこと。積雪は30cm程だがパウダースノウでワカンは不要だ。

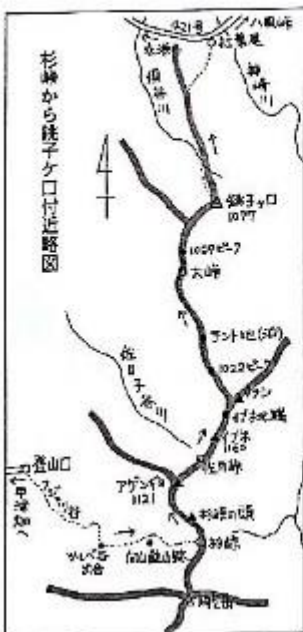
杉峠に着き、北へ向けて縦走が始まる。まずは杉峠の頂、さらにアゲンギョ、そして佐目峠。佐目峠は灌木に囲まれ、もはや峠の風情は失われている。雨はみぞれとなって横なぐりにたたきつけてくる。行く手のイブネは霧に閉ざされ、ひたすらブッシュの斜面を登る。

風にうなるイブネの原は鈴鹿山脈の雄大な景色を失って荒涼としていた。積雪は根雪を含めて30〜40cm、さらに北へ進むとイブネの北端に山だ。そこには一つのメッセージが木にくくりつけてある。「クラシ 殺人的ササ分け 今クラシとは来た もうコリゴリした」クラシとは

そこから北西にあるピークだ。

ササとカヤの草原に出た。無雪期には恐れられているそれらブッシュも、冬には積雪の重みで倒れ、多少の積雪と昨日の積雪で柔に歩ける。歩きよくて北に行き過ぎてしまい、引き返して北西のコーラスをとる。まばらな樹林帯になり風根がやや明瞭になる。テープが頻りに出てくる。樹林帯とはいえブッシュは続いている。銚子と言われているあたりだ。

やがて明瞭な稜線となり、10222mのピークと思われる箇所を過ぎた所に、「某名山岳会」の98年10月の標識があった。あたりはブナの林だ。鈴鹿の深奥部を実感させる見事な幹周りのブナ樹に感心していると、すげに尾根は急降下を始めた。シヤクナ



ゲの幹につかま  
り雪を滑りなが  
らおりました。マン  
サタの黄色い花  
が雪をかぶって  
いる。こうい  
う可憐な花に出合  
うと、地形は険  
悪を極める場合

が多々ある。鞍部におりると案の定やせ尾根が始まった。一つが終わるとまた次がある。ガスではっきりとは分からないが、両側はかなり深く削れている。そのうち西側のガスが切れ、佐目子谷に落ち込む時間ではあったがガスが切れ、佐目子谷とその西の山麓が悠然と視界に現れた。北東に望む三角錐のピークはカクレグラではなかるうか。

やせ尾根が数ヶ所続き、とどめは垂直に落ち込んだケネット状の所で立ち往生。右手の雪の斜面をトラバースして捲いた。ガスと雪と突風のせいもあっただろうが、思わぬ難所であった。

そろそろさよう一日のフィニッシュにしなければならぬ。行く手に山腹が見える。平地を探して登ると、ブナ林のなかに適当な所があり、6人用テントを広げた。ゴーゴーという風の音が終夜天をおおった。

翌朝、5時起床。外が白む頃、テントの外に出ると灰色の吹雪の朝だ。烈風がテントと樹林を凍結させ、さながら冬山の世界だ。ポールも凍りつき、ガスコン



銚子ヶ口山頂

口で温めてから抜いて折り込んだ。  
テント地を出発してすぐに再び急峻な崖にはさまれたやせ尾根に出た。やはり西側が深くえぐられている。ガスで全貌が見えないのが幸か不幸か、雪の尾根をまたがるように通過し、やせ尾根はやつと終わった。

細かい雪を含んだ風は相変わらず強い。間違ったテープに誘われ支稜に入り込み、引き返す。このあたりにはテープはまれだ。そのかわり赤いボールが尾根に沿って埋められている。ブナの樹林は吹雪にゆれ、我々はひたすら雪上を歩くのみだ。

尾根は急に広がりゆるやかな山裾に出た。コースをとりにくい地形だ。だが、ゆるやかな丘陵を越えたと行く手に峠と山が見えた。大峠であろう。大峠から一

0677のピークに登り着く。積雪は50センチとやや深くなる。白い世界がいつまでも続く。

10時14分、銚子ヶ口に登り着いた。ひょうひょうとした雪と風の世界。杉峠からの山域はガスに閉ざされ、我々はまるで二日間の彷徨から抜け出てきたように思われた。下山に向かうが、鈴鹿はトリッキーな地形の所が多い。銚子ヶ口山頂の周辺もそうだ。そうと分かっているも幻想めいた樹林のなか、違った方向へ行きかけてしまおう。慎重に下山する。

13時に紅葉尾の里におりた。里も春の吹雪だった。予定のバスの時間には早過ぎ、里を抜けて酒屋に入り、タクシーを呼んだ。

JR近江八幡駅から快速に乗り込むと山が遠くなった。あとは山でのことをあれこれ思いだすだけとなった。ふり返ってみるとほとんど紅葉とというものがなかった山行だった。吹雪とガスのなか、ただ雪の上とササの原と樹林と、時にはやせ尾根をひたすら歩いただけなのだが、何か多くのものを見たような山行であった。

銚子ヶ口の頂でやって来た方向をふり

返った時、雪とガスと風の向こうに言い知れないものを感じた。あの感情を何と言ったらいのだろうか。例えば北山にも比良にもない人間の孤独がそこにはあった。それが鈴鹿の奥山の魅力であり、また、畏怖であるのかも知れない。

(平成11年3月21日・22日歩く)

#### ▲コースタイム▼

※縮走路に30〜50分の積雪。

登山口(3時間) 杉峠(20分) 杉峠の頭(40分) イブネ(1時間) 10222ピーク(1時間15分) テント地(泊)  
テント地(1時間) 大峠(10分) 10677ピーク(1時間10分) 銚子ヶ口(2時間30分) 紅葉尾

#### ▲費用▼

山上新田〜登山口(タクシ12860円)  
紅葉尾〜八日市駅(タクシ17340円、路線バスもあり)

▲地図▼2万5千円御在所岳

#### ▲参考の文献▼

西尾寿一「鈴鹿の山と谷」(ナカニシヤ出版)、岩野明「新ハイキング関西の山」(近江側から登る鈴鹿の山々シリーズ)、辻涼一「鈴鹿夢幻」(山人舎)

## 台高山脈の支稜

# 千秋峰から松塚

20数年前、奥志賀の運ダムがまだなかった頃、運の三軒屋山の家(廃校の小学校を転用、現在は閉鎖か?)に前泊して、週行したヌタハラ谷の連灘・名浜はすぼらしかった。ヌタハラ谷を登りつめ、飛び出した松塚の美しい山と庭園風景は衝撃的でさえあった。今なお、その時の光景が目に残り付いて忘れられない。松塚とその周辺の山々は、台高山脈のなかで、私の最も好きな山域の一つとなっている。山頂付近のササは当時に比べて背丈が低く、また薄くなったようだが、その後枯れて再生したのだろうか。

早春の一日、岳友を誘って青田からトガ尾を経て千秋峰に登り、松塚への縦走

## 金谷 昭

### 台 高

を試みた。以前に比べて、中腹以下は樹林が進んでいたが、松塚付近は以前と変わらず自然林が残り、獣の臭いの漂う原始林で、自然派にとってはたまらない山域であった。また降路にとった松塚山頂の北斜面の庭園風の大草原と大展望は、この山行にあざわしいすばらしいフィナーレとなった。

巨朝京都を離れ、国道16号号線の高見トンネルを更に抜ける。大滝より橋谷を通り、加杖坂峠トンネルを抜けて、出合の青田発電所の見学者用駐車場に車を置いた。この発電所は無人だが、外部からの観察窓と押しボタンによる説明放送があり、一般見学者に開放されている。

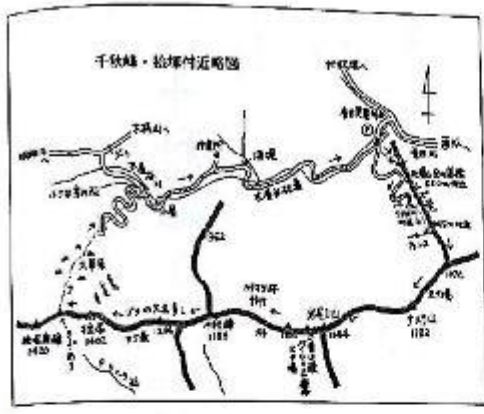
松塚の下り(高見山・兜・笹・倶利伽羅山等を望む)



昨夜の雨もすっかり上がり、見上げる山裾付近は霧水であろうか白く輝いている。青田より千秋峰に向かって林道が新たに出来ていたが、地図にある稜線(トガ尾)の敷路路を行くことにした。

大屋谷川出合のすぐ上流の橋を渡り、対岸(右側)の林道を2000m程度で、杉林の山腹に作業道が出てくる。林道と分かれば、この道に取っく。

いきなりの急な登りであったが、稜線（トガ尾）に出るとすこし緩くなる。高田川側は樹の植林地となっている。標高約650付近で先程分かれた林道が稜線に近づいてくる。ここで稜線の踏み跡は消えてしまうので、稜線のブッシュこぎを避けて林道を利用した。緩やかな林道を歩いても左右は杉植林が幼木のため、眺望は良い。台南山脈主稜の高見山を始めとして、支稜線の木尻山・マヌガタ等が見



え、これらの山への登山の思い出がよみがえってくる。  
 林道終点（標高約750付近）からは、踏み跡はない。植林帯に入り、稜線沿いの要除けのネットフェンスをたどって行く。植林の杉は若木のため見通しは大きく、イバラなどのブッシュが多く歩きづらいくらいにおびただしい。標高約945付近でフェンスは稜線から離れ、山腹を横に横切っている。幸いフェンスの出入口があったので、植林帯を出て稜線の疎林のなかに飛び込む。1074付近に向けて、標高線の混み合った急な登りが始まる。急な稜線のブッシュこぎも山頂が近くなると、踏み跡ははっきりしてきた。登りつめた1074付近は疎林に囲まれた展望の良いピークで、これからの稜線が見え、稜線がはるか遠くに尖峰となつて他を圧倒してそびえている。  
 ここから稜線のピークまではかなり時間がかかりそうなので、岳友と時間切れのことも考えて、逃げ道の相談をした。1186付近より北へ962付近を経て、楔谷川を渡渉せずに直接、木屋谷林道に降り立つことができる比較的ゆるやかな尾根をとることにした（幸い時間切れの事

態は免れ、無事となった。  
 稜線では昨日の小雨が霧水になっていた。1074付近から稜線への稜線は明瞭な踏み跡はないが、稜線を踏みはずさず、忠実にたどればよい。下生えの少ない疎林で見通しがよく、緩やかな尾根にはヌタ場が出てきて、獣の臭いする原生林のなかなを行く。急な登りもそう長く続かず、ゆっくりと高度を稼いで行く。やぶこぎ派には頼りないだろうが、自然派にとっては山上歩が楽しめる。  
 ナメラ山の山頂へは急な登りとなる。山頂の点標石（三等三角点）は広い台地の明るい樹木の疎林のなかにあった。少し早い雨が落ちて曇りかけた。クッションの上で昼食とした。  
 次のピークの岩尾口山（1144）とさらに先の千秋峰（1186）との間にはヌタ場があり、バケイソウの群落もある二重山稜が出てくる。また、なぜかカラマツ林が出現するがおそらく人工的に植林されたものだろう。  
 千秋峰の頂上には東西に細長い台地の最高点であり、顕著なピークでもなく、山名標示もないので気づかずに通り返さしてしまうところであった。千秋峰からは

この稜線縦走の核心部に入った感がある。ブナの大木を所どころに配した山上寛闊部のササ原が出現し、さらに稜線の頂上に近づくと、同峰の東北側の岩壁を右に見ながらの登りとなる。ふり返ると今まで歩いてきた稜線が見える。遠くには三峰山地の望土、三峰山と阿ヶ岳、さらにその奥に大海山を始めとする巒沓群の山々が見え、本縦走も最高潮となる。  
 展望を楽しもうちに稜線の頂上に飛び出した。予想に反して1104付近からはほとんどやぶこぎもなく、意外に早く稜線に到達することができた。早速、例によって出ビルで乾杯。岳友たちのそれぞれ顔には山を歩く喜びが溢れ、至福のひとときを過ごす。  
 春の休日にもかかわらず季節が早く。

たからであるうか、他の登山者にはだれひとり出会わなかった。山頂での大休憩の後、山上庭園風の大豆原の稜線をたどり、既登の稜線奥峰は割愛し、それとの鞍部（赤テープあり）から北斜面を木屋谷林道へと踏み跡をくぐる。  
 稜線を少しくだると、そこは立木の全く無いササの大草原。360度開きの一大パノラマが展開し、山を歩く喜びも最高潮となり、好天とも相まってすばらしいワイナリーとなった。  
 口腹からは杉の植林地となり、作業道が入り乱れて迷いやさいが、幸いテープを拾ってくだると意外に早く木屋谷林道に降り立つことができた。  
 飛び出した林道に、登山中の空車荒らしの注意書きがあり、山行の余韻から、

いきなり嵐突に引き戻されてしまった。（平成11年4月3日歩く）  
 ○本コースはロングコースのため、早朝出発。熟練者のリーダーと同行すること。本文の逆コースは荒天時、尾根分岐で迷いやすい所が多い。道標はほとんどない。稜線から木屋谷林道へは途中の林道からでも距離は長くなるがおりられる。  
 ▲コースタイム▼  
 青田発電所（2時間）1074峰（20分）ナメラ山（1時間15分）岩尾口山（1時間）千秋峰（40分）稜線（5分）  
 稜線奥峰との鞍部分岐（1時間15分）木屋谷林道（1時間15分）青田発電所  
 △地形図▽2万5千1大豆生・七日市

**大和まほろばの山旅**  
 内田嘉弘 著 四六判・二〇〇円  
 一奈良東北・中部の山一山の辺、大和高原、宇陀、宇生、初瀬、飛鳥、金剛、生駒、古史探訪も併せた名山ハイキング。約60山地図 参考タイムつき完全ガイド

**関西の山日帰り縦走**  
 中庄谷 直著 四六判・二〇〇円  
 六甲、多紀、京都北山、比良、湖北、生駒、葛城、金剛、和歌山、全40コース。  
 一日で縦走できるコースを厳選して詳細地図で紹介。交通機関や所要時間も。  
 ナカニシヤ出版  
 京都市左京区吉田二本松町2  
 ☎075-751-1211 〒606-8316

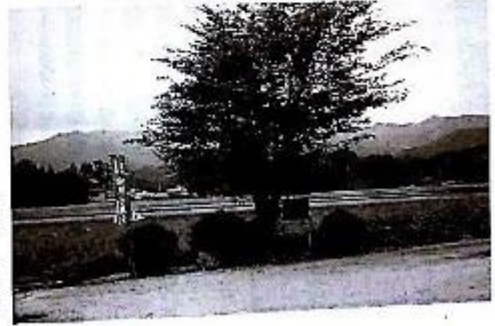
『万葉集』歌枕紀行 大和三山(下)

香久山から畝傍山へ

飛鳥

木村 太郎

磐余池跡を育にした大津皇子の歌碑



(巻二一八五)

藤原京址の東方、磐余と呼ばれていた地には、古代大和の歴史の跡が残されている。訪ねた御明子神社は清寧天皇の磐余磐余宮が置かれていた小高い丘陵上にある。磐余池があった場所と伝わる緑の田圃広がる御宮下の広場には、大津皇子の歌碑が立っている。

ももつたふ磐余の池に填く橋を  
今日のみ見てや雲隠りなむ  
(巻二一四一六)

磐余歌田(接井市)の金で刑死を賜った大津皇子が、磐余池で詠んだ神代歌である。その時、大津皇子妃の山辺皇女は、馬鬣を振り乱して素足で急ぎ走り、刑場で殉死をとげたという。『日本書紀』

が伝える悲話である。  
『万葉集』では、大津皇子への大伯皇女の挽歌のすぐ後に、草壁皇子への柿本人麿の挽歌がつづく。大津の亡き後に草壁の世も無かったと知らせて、悲劇の皇子への鎮魂の意図を窺察したのであろうか。

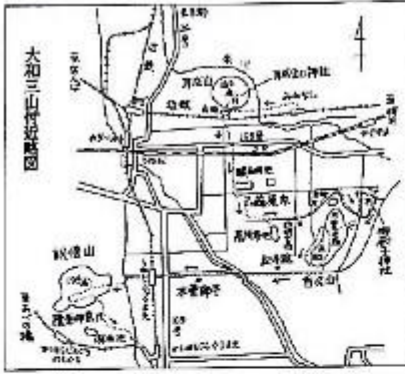
ともあれきょうは、多武峰と三輪山の美しい山容を堪能して、みずし観音と大津皇子の地に別れを告げる。果樹園売店の道を折れて、『万葉の森』へと来た道を戻った。森の散歩道に万葉歌碑が立ち並んでいる。  
水伝ふ磯の浦廻の石つつじ  
茂く咲く道をまたも見むかも

草壁皇子への挽歌は、人麿の長大な歌のほかに、宮の舍人が慟哭して二十三首もの歌を寄せている。その中の一首、皇子と過ごした永遠の春を哀惜した歌である。  
秋の日に秋の花が紅葉色を濃くして、坂の上へ道がのびる。人麿呂・旅人・家持ら、万葉を代表する歌人たちの歌碑を

めぐりつつ森のなかへと歩いた。小さな水路が散歩道を分断している場所に出る。右手の山側を見ると、防設状の道が巨にこまっていた。

下草の生えた所を横切り、香久山の領域へ踏み入った。山道のかたわらには、ツメ・カラクチ・ヤマブキなど、万葉の花木が見られる。ネムの木におおわれた四阿を過ぎて頂上に近づくと、松枯れが巨に広がった。

香久山は文学史上日本最古の山といふ言ひ方ができる。『古事記』の神代の巻



で、その山名を知ることができ、『万葉集』にも多く採られた古典の山である。香久山(香久山)の山頂には、国幣立神社が鎮座する。展望は北西の方向が開け、大津皇子が移葬されたという上山が見えた。

山頂から北麓に通じる分岐へ戻り、天の香久山神社へくだる。この神域内では傳統天皇の御製歌と並べられて、『万葉仮名で彫られた柿本人麿の歌碑と対面できた。  
ひさかたの天の香良山この夕  
霞たなびく登立つらしも  
(巻十一八二二)

歌名高き人麿の身分については、元又は草壁皇子の舍人であったという仮説がある。それゆえ草壁を愛した傳統に召し出され、宮廷歌人として才能を発揮する場面が与えられたのか。この歌の「春立つ」という表現に、華やかな文帝時代の到来を予感した、明るい響きが見られる。

天の波波と呼ばれる朱桜の木の下に立てば、この神社の歴史の奥深さを想ふことができる。『古事記』の天の岩戸の巻によれば、太占という神事の場で、神々

に古凶を問うに使われた靈木だという。天の香久山のシンボル波波道の木と、人麿の歌を刻んだ歌碑から、遠き時代のメッセージが伝わってくる。

香久山神社を離れて南下する。柿畑を右手に見て、山を登りながら麓の道を西に進む。この麓道は、いつかどこかで見た風景と再会したような気持ちにさせてくれるものがある。大和を実感させる道でもある。西麓の登山口あたりに来ると視界が開け、大和国原のたたずまいが見渡せる。

西麓登山口の横に、香久山へ登り国見をされた時の、舒明天皇の立派な歌碑が立っている。  
大和には群山あれどとりよるふ  
天の香久山登り立ち国見をすれば  
国原は輝立ち立つ海原はかまめ立ち立つらまし国をあきつ島大和の國は

国原とは目に見える景色だけでなく、大和王朝の統治する新境地すべてを指している。海原とは津波の海を始めとして、國中へ貿易船を吹かせた大海のことである。この国見の場所から、『うまし国』という言葉で、国土賛歌が発せられた。



コスモスが咲く本薬師寺跡から欽傍山を望む

れており、北東から西南にかけて風光絶佳が楽しめる。鳥見山・三橋山・若見山・生駒山・二上山・葛城山・金剛山など、なじみの山々が広がっていた。

山頂の三角点のまわりには、ヤマモモの木が茂っている。欽傍山の西中腹に移された欽傍山口神社は、以前は頂上にあった。往時の遺構のそばに、萩の花が奥ゆかしく咲いていた。

思い余りいたもすべなみ玉だすき  
欽傍の山に我標結ひつ  
(巻七〜一三三三)

思いを寄せた女性にふたてで、自分のものにするため山に標を結んだという、欽傍山への恋歌が伝えている。

そろそろ夕暮れが迫るころ、去り難い山頂を後に鞍部へ戻った。下山は来た道の反対側を遡んで、東大谷日女命神社を通り、神宮寺道へとおりていく。神功皇后を御祭神に安産祈願の善女に門を開く欽傍山口神社への分岐を見るが、寄り道する時間はない。

欽傍山の道には小さな草花が彩りをそ

大伴旅人が樹皮にあつた時、「散らむ時にし行きて手向ける」と詠んだ、旅人の愛した故郷の萩の花である。その旅人が死んだ時、主人をしのび余明景という従者の詠んだ歌がある。

かくのみにありけるものを萩の花  
咲きてありやと問ひし君はも  
(巻三十四五五)

「万葉集」の巻に、最も多く詠まれた花、その萩の花に飾られた欽傍山は、万葉人にこよなき憧憬をいだかせた山であった。

- △コースタイム▽
- 近鉄耳成駅(30分) 耳成山山頂(30分)
  - 藤原京址(15分) 泣沢の森(20分) 古池
  - 万葉の森(10分) 御厨子神社(30分)
  - 万葉の森、香久山山頂(25分) 天香久山
  - 神社、天の岩戸神社(35分) 紀寺跡、本
  - 薬師寺跡(20分) 若桜友苑(25分) 欽傍
  - 山山頂(40分) 深田池、近鉄福原神宮前
- △地形図▽2万5千1:5000 桜井・欽傍山  
△問い合わせ先▽  
近畿日本鉄道上本町事業  
06(6775)3566

大和の香久山こそが、万葉の故郷だと実感できる舒明の歌である。

万葉の森を散策していた時には明るかった空も、雲行きが少しあやしくなってきた。雨籠にある天の岩戸神社へと急いだ。神社の近くに「飛鳥の跡」という古代チーフスを復活させた西片牧場の山荘があった。搾りたての牛乳を飲みながら、店先の円卓で空模様をうかがう。九州に台風が接近し、日本海に前線が停滞しているこの日、天気予報は荒れ模様を告げていた。

香久山の山道をくぐっていた時に、連雷が聞こえ、天気が雨も通り過ぎていった。岩戸神社では、御神体の岩室を守護した群竹の中にいた時、暗くなった空から小雨が落ちてきたので慌てた。茶店から抹茶のアイスクリームまで注文して、一本立てている間に天気が回復した。いい塩梅であった。朝のように再び日が差し始め、青空をとり戻した上空を見て、茶店を後にした。

九州の太平府の地より、都を思いだして詠まれたものであろう。憂いを忘れさせるという、わずれ草(菝葜草)の花を衣の紐につけて、香久山を望む懐しい故里を忘れようとした、切ない望郷の歌である。

近鉄欽傍御陵前駅の地下トンネルをくぐり抜けて、福原神宮神社へと到着。欽傍山へは若桜友苑の慰霊碑を通り、絆の館というモニュメントがある場所から入山できる。欽傍山の道は所どころ岩塊が露出していた。やわらかい「うねび」という、曲線の意とは異なった荒々しい印象さえ受けた。

紀寺跡を歩いていた時に頭上にあつた太陽は、自分を追い越して山向こうに行っただろうか。暗い樹木のなかを鞍部へ登り、頂上への分岐を曲がり欽傍山(999m)の山頂に立った。

眺望は大和三山の中ではいちばん恵ま

低山登山～本格トレッキングまで、登山用品のことならおまかせ下さい。

駅ハヤシの会員証で更に割引します。




**とスキーのヨシミ**

〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀4-70  
TEL 06(6772)7231

JR天王寺駅  
北出口右へ  
歩道橋渡ってスグ



『新篇武蔵風土記稿』(その一)

浅野 孝 一

宮内のことについて書いてみる。生れたのは大正六年(1917)で、太平洋戦争中の昭和十八年(1943)中国大陸南京で戦病死した。二十八歳であった。兵隊にとられるまで約四百余日奥多摩に運った。山村民俗研究会役員であった。現在と違って休日日曜・祭日のみであり、山行の自由も制限されていた。立川駅発の青梅電車は御岳駅が終点で、それから先へはバスに乗った。日原へは氷川から歩いた。

五日市鉄道も立川駅から蒸気機関車が運行していたし、終点の武蔵五日市駅から本宿までバスに乗り、それより奥は全て歩いた。そのような時代に宮内は『奥多摩』の大書を書き上げたのである。宮内の著書を読んで、私は江戸期から明治期にかけて作成されたいろいろの地誌があることを知った。しかしそれは知ったという認識だけであって、克明に読み始めたのは四十代後半のことになる。そして前記宮内や高畑、木暮理太郎等の事蹟を再認識したのであった。

木暮理太郎(1873-1944)、登山家・歴史家。『ハガキ文学』(『東京市史稿』)の編集に従事した。登山は明治中

山へ登ってみるとか山中を歩くという場合、ただ単に歩くというのによいが、山に関する自然や歴史を知ってから行くのも大切なことであると思う。

私が好んで歩いた奥多摩郡や比企郡・高麗郡・秩父郡の山については十代後半から三十代にかけて読んだ高畑棟材や宮内敏雄の著書の影響があった。

高畑棟材(1897-1958)は大正期から昭和期にかけて関東・木曾周辺の山を歩き、一般大衆に向けて登山の楽しさを普及した。著書に『山を行く』『山脈通信』等があり、また初代『山小屋』の編集にたずさわった。それ等の著書を通じて私は『新篇武蔵風土記稿』や『多

摩郡村誌』『武蔵通志』等の文献地誌のあることを知った。

しかし二十代、三十代は山へ登っても山の歴史など考える余裕もなく、遠く無二駆けずり廻ったものであったが、五十代後半になると体力的にも無理がきかなくなつた反面、若十ではあるが世の中のことを考える余裕が生じてきた。もちろんその考えの大半は山歩きに関するものであった。

その当時、奥多摩の山を歩いていていちばん参考になつたのは、宮内敏雄著の『奥多摩』であった。内容の多くは江戸期よりの文献等を引用して奥多摩の山名や地名などを解説したものである。

期より山部重治らと行動を共にし、奥多摩・奥秩父・南北アルプスに登った。その紀行は『山の懐ひ出』二巻にまとめられている。昭和十年(1935)日本山岳会第三代会長に就任した。

高畑の著書『山を行く』の「奥多摩の山水」の中の文章で江戸期の文献を知ったのであったが、それは次のようなものであった。「……因みにヨノ山の別稱『吾之山』に關しては『新篇武蔵風土記稿』多摩郡之二十六・三田領御嶽村山川の部に、吾之山 御嶽山ノ東二十町許ヲ隔テ、アリ高一里餘ニシテ耶木繁茂スル山ナルニヨリ山下一鳥居ノ邊ニテハコノ山ニサイキラレテ御嶽ノ山ヲノソムコトアタハス故ニ里人アンサマニ云ントシテカク呼ベリ」と出ているもので、私が初めて『新篇武蔵風土記稿』の文章に接したものであった。

私の山歩きは奥多摩から始まった。商業学校の同級生といふことで、晩春のことであった。五十年も前のことであり、奥多摩といふことでも身近に感じるものがある。平成九年(1997)の正月休みに私は青梅線に乗った。青梅駅を過ぎると電車は多摩川沿いの河岸段丘を進ん

て行く。進行方向の左手に多摩川の支流、秋川をめぐる山々が見えてくる。眼下を流れる多摩川の右手に高水山を中心とした山々が近づいてくる。青梅線が川の流れに沿って大きく曲流するあたりから、多摩川の谷奥に雲取山から東にのびている石尾根の一部が見えてくる。幾度見てもこの瞬時の風景には心うたれるものがある。このように風景のなかに山の形や山名を探し求めることを山座同定というが、山々の名称を知るにはある程度の学習が必要である。私は奥多摩の山々を見て『新篇武蔵風土記稿』『武蔵通志』『多摩郡村誌』の世界に入つてゆく。

それぞれの地誌にはさまざまのことが書かれてあった。地誌を読み山へ登って、私の山の知識は増幅されたのである。それ等の地誌は過去の記録であると考えると同時に、現在私たちが歩いている風景のなかにある歴史的事実をも見ることもできる。

ここでは『新篇武蔵風土記稿』のことについて述べているが、その成立について説明を試みてみたい。

江戸幕府は時代が安定すると共に日本国内の地誌の必要を感じるようになった。

『新編風土記』は文化初年(1804)昌平坂学問所の林大学頭銜の建議によって具體化された。林大学頭銜(1768-1841)は美濃岩村藩主松平乘通(三男、寛正五年(1793)大学頭信敬の嫡子)となつた。林家中興の祖と称せられ『寛政重修諸家譜』『武家名目抄』『徳川実紀』等を著し、『新篇武蔵風土記稿』『新編武蔵風土記稿』の編纂に力をそそいだ。そしてまず武蔵国をその対象に選んだ。江戸期における地誌編纂事業は、元禄後期より始められ、関東周辺に限っては、享保七年(1722)『佐倉風土記』磯辺昌保(1717-1782)『江戸砂子』菊丘沾原、安永二年(1774)『上野国誌』林義輝寛政十二年(1800)『伊豆七嶋志』『沼津志稿』伊豆総督・秋山京『武蔵志』福島東雄、文化十一年(1814)『甲斐国志』松平定能、文化十二年(1816)『武蔵野話』斉藤等々が発刊されたが、ごく一部を除いて個人的著作のにおいが強い。(2)『砂子』(

## 豊富な残雪の山

# 武奈ヶ嶽

野坂山地の最高峰、三重嶽(974.4m)の南に同じ位の量感でどっしりと構えた武奈ヶ嶽(865.8m)がある。比良の武奈ヶ岳との違いを明らかにするため、俗に湖北武奈ヶ嶽と呼ばれている山だ。以前、この山の南にある二の谷山(610m)に登った時、地元の人に「湖北武奈ヶ」と言われて少々怪訝な顔をされた思い出がある。伊那盆地に住む人にとっては西駒ヶ岳(木曾駒ヶ岳)と東駒ヶ岳(三交駒ヶ岳)があるように、今述べて住む人には単に武奈ヶ嶽があるのであり、実地形図にもそう記されている。

三重嶽・武奈ヶ嶽・二の谷山の三山は親族のような似た風貌で北より背の高い

## 松田敏男

## 湖北

順に一列に並んでいる。これら三山のよりに雑木林と踏み跡程度の静寂の世界の山に、私は近親者のような親近感を覚える。

三山の中で一番奥深いはずだった三重嶽は、北東方向の林道から短時間で登れるルートができて、最も入山者が多いのではないだろうか。私も結局はそのルートで登ってしまったが、地形図「服川」を広げては、三角点より南西にのびる長い尾根を注視することがたびたびあった。武奈ヶ嶽は残雪期に角川の集落から登ろうと集落の北のはずれにテントを張り、翌日尾根の末端に取りついたが、雪が少な過ぎて断念したことがある。

ガイドするようにしてテントを張る。林道横の残雪の量、明日の好天予報を考えると登頂の難率は高い。あとは花粉症が開始した身を案じるだけだ。ぐっと冷えて冬に戻りますようにと、これは確率の低いお願いである。

晴れた暖かな朝を迎えた。食事の用意は朝食を岩井さん、昼食を私が担当したのだが、岩井さんがうどんの袋を出した時に、山の好みの一致は食事のメニューの好みにまで及んでいた。私はこの正月前後の山行で冬用の昼食メニューのヒット定価を確立した。四倍増の値段に、ペーコン・ちんげん菜・あんべいまたはかまぼこ・がんとどきを煮込んで生めんを入れ、土しよがと七味で仕上げなのだ。寒い時でも少し濃い目のだしと七味



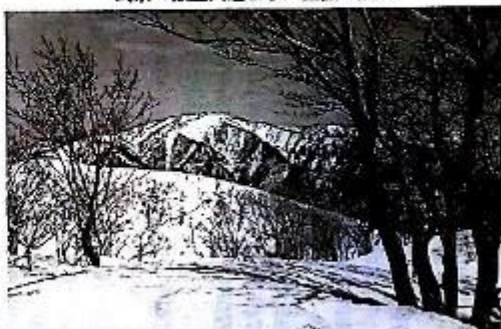
や土しよがのおかげで、ビールを飲んだ冷えた体でさえも十分暖まる。

さて朝食のうどんはきつねだった。持参の七味をかけておいしく食べている最中に、ふっと不安がよぎった。昼食用のだしを忘れたのではないかと。あわてて買い物袋の中をかき回すが、なかった。人なので液体だしを買うとたくさん余る。家にある粉末のだしにしよがと店先で買ったものが頭になかったのだ。忘れ物をしないようにするには、山の道具と同様繰り返し山に持って行くことで慣れていかななくてはならないと、山へ行くべき理由をまたこしらえる。鍋の底に少しだけ残っている汁をテルモスに入れて居のだしにした。薄味うどんの「う」がとれて、ほとんど素味うどんだ。

食事の話題を避けながらテントの撤収を始めた。ポカポカ陽気ののんびりとした朝の空気を創るように車の近づく音がした。

「この山にも登る人がいるんやろか」「だれにも会わへんと思っていたのになあ」

武奈ヶ嶽登山道より三重嶽を望む



そして、今回は集落からきつちりと登ることを回避して、石田川ダムまでの林道を利用することにした。リーダーは岩井さんで、三重嶽の時と同じである。彼もこの一族の山々に親近感を持っているようだ。石田川ダムまで險峻な山道で夜間でもスムーズに上がれた。塚堤横に上がって岩角を回り込んだ所に広場があった。テント場にする。安全のために車で

をぐいと素早く曲がってくる疾風のような車は、わが金の大山さんだった。

「たぶんここだと思っただけだった」と笑顔で言いながら大山さんが車から降りてきた。

「大山さん、しよがを持ってへんか。昼のうどんがピンチや」

寿司についている金魚形のしよがを一個、大山さんがザックからおもむろに出してくれた時は、まさに子ども向けドラマの正義の味方のような感じだった。

地形図読みでも頼りになる大山さんの参加で山行も気が楽になった。それにしても月初めに発表する山行計画表に登山ルートなどの表記はないのに、登ろうとする時間に登山口にピタッと到着するとは、さすがわれわれの行動まで読み抜く洞察力で、ただただ感心するばかり。小さな会ならではの交流の深さの結果だと感うと、たまらなくうれしい。

雪が深いのでやぶこぎも少なく歩きやすい。ラッセルは慣れてコツをつかめばそんなに疲れるものではない。むしろ日帰りの軽装備という条件下での話だが、足裏全体をじんわりと水平に雪の上に置いて、左右に体が揺れないように注意し

## アミューズトラベルの山歩き

全てのコースで、経験豊富な自社社員のツアーリーダーがご案内いたします。  
初心者の方や中高年、女性一人様でも安心してお申し込み下さい。

### 美ヶ原と霧ヶ峰 (雪山初心者大歓迎)

アルプスやハケ岳の大展望が広がる、澄んだ空気の中、白飯の世界を歩きます。  
冬の百名山2座に登頂します。

3月18日(土)~19日(日) ¥37,800

### 乗鞍高原スノーシューハイキング (雪山初心者大歓迎)

今話題のスノーシューでハイキングを楽しみます。乗鞍高原の美しいシラカバの林を抜けて歩きます。雪化鞋した、北アルプスや乗鞍高原の展望も楽しめます。

3月25日(土)~26日(日) ¥58,000

### ハヶ岳 赤岳登頂 (雪山経験者向き)

冬の晴美の美しい、ハヶ岳。岩稜帯の上りが続く地蔵尾根から頂上を目指します。  
より実証的な雪山探検の頂上が期待できます。

3月10日(金)~12日(日) ¥94,000

### 久米島 宮之浦岳と縄文杉

九州最高峰の宮之浦岳を登頂し、樹齢200年ともいわれる縄文杉を訪ねます。  
巨石や巨木の点在する素晴らしい山です。

3月23日(木)~26日(日) ¥118,000

桜開花100周年記念 特別企画

### 幻の桜蘭(ローラン)探検の旅 12日間

その昔「一度入ると二度と出られない」と恐れられたタクラマカン砂漠とタリム盆地を四輪車で走り、様々な自然の風景を楽しみながら、最後は徒歩で桜蘭を目指します。  
スウェン・ヘディンが桜蘭を発見して100周年の記念特別企画です。

3月23日(木)~4月3日(月) 特別価格 ¥999,000

### ロッジ泊で歩く エベレスト展望トレッキング 9日間

世界最高峰のエベレストをご自分の目で見に行きませんか? ヒマラヤトレッキングの中でも1、2を競う人気のエベレスト街道をゆったりと歩きます。

3月25日(日)~4月3日(日) ¥348,000

### 中国 黄山最高峰 蓮花峰登頂 4日間

山水の世界、黄山の最高峰にコンパクトな日程で登頂します。

①3月23日(木) ②3月25日(土) ③30日(木) 各¥107,800

日帰りから海外までのパンフレット(140ページ)があります。ご購入下さい。(送料別)

**アミューズトラベル株式会社 窓06-6456-3366**

運輸大臣登録旅行業第1366号 (社)日本旅行業協会正会員 JATA ボンド保証会員

〒531-0001 大阪府大阪市北区梅田1-1-3 大阪駅前第3ビル7F FAX 06-6456-3377

E-mail amtosa@po.teleway.ne.jp http://www.amuse-travel.co.jp

て、そりりと体を引き上げることの繰り返しでゆっくりと進む。もう一つの注意点は雪を踏み抜かないように足の置き場を選ぶことだ。日陰とか樹木から離れた地面とか、雪の回そうな所を歩くわけだ。たとえ踏み抜いてもあわてず、ストックと踏み抜いた足で、ぐらつかないようには力を抜いてまっすぐストンと着地することだ。そうすれば自然に逆らう時に放出してしまう無駄なエネルギーを使わなくて済む。樹木の密生したなかを進む時は雪に埋没しかかっている枝の上を渡って行く。傾斜が少し急になればストックを短くセッティングして両手で両端を持ち、足やリスなどの動物のような気持で雪面を登る。しかし後ろ足で踏めるようなこともできず、他の動物から見れば格段にみっともない歩行だが、四つ足になることでそして上半身も雪に埋没するほど近くなることで、自分も自然の一部になっているような喜びが湧いてきて、なかなか楽しいものだ。またすぐ目の前の小さな雪のくぼみの中に、雪のなかで生きる虫が動いているのが発見できたり、動物の足跡が目録の高さで見えたりして楽しいものだ。水袋に買ったストックでつくっ

た踏段状のくぼみに次の二歩を置けば効率的だ。もっと急になればまず膝で雪を圧縮して足掛かりを確保してはならないので、速度がぐんと落ちる。花粉症の症状が出始めたので境界が狭くなり、地形の把握とかまわりの状況を察知する能力が鈍っている。でもきょうはしっかりとした人が2人もいっしょなので安心だ。雪面が白く輝き、樹木は対照的に黒々としている。花粉症対策の色黒いサンクグラスを通して、雪面と樹木とのコントラストは鮮やかな美しさを与えて目の前に広がっている。木の枝の葉の細かな一枚ずつが、また冬枯れた木々の細かく枝分かれした枝先の輪郭が、静まり返ったやわらかな雪の曲線に微動だにせず凍り立ち上がっている。山脈の季節が過ぎててもなお、さんさんと光を浴びて気持ちよく巻腹をむきだしている風情だ。

上の尾根に出ると北側の展望が開け、三重嶺の大きな山容が見えてきた。三重嶺は洪い魅力にあふれていたことを思いだしながらラッセルを交代して登った。山頂は雪の大斜面だった。三重嶺の左には白い稜線をひく三十三間山が望まれ、南方はるかに比良の武奈ヶ岳が逆光のなかにあった。その真下に二の谷山が小さくうずくまるように重なっていた。頂上は西風が吹いていたので、少し下の雪のくぼみにおりて、薄味のうどんを食べた。

下山にかかってしばらくだった所で、めずらしく2人の登山者に出会った。それも若い男女ペアである。「トレーヌがあったので乗をさせてもらいました」

若い男性は笑顔であいさつをしてくれた。そのザックの背負いベルトに赤テープを組み込んだカラビナをつけているのを見て、若いのになかなかできる人だと感心した。若い人がさりげなく爽やかに登ってきたことがうれしかった。

暖かな午後なので表面を踏み抜いてしまふ雪になっていたが、気ままに快適に駆けおろるようになっていった。

(平成11年3月14日歩く)

△コースタイム▽  
石田川ダム(3時間30分) 武奈ヶ嶺(1時間40分) 石田川ダム  
△地形図▽ 万5千 熊川







黒沙門岳から鴛子ヶ峰・三ノ峰・一ノ峰・別山・白山を望む

北の山岳展望にあるというべきなのだろう。北東には、眼前に相対する大日ヶ岳。北には鴛子ヶ峰・一の峰・三の峰・別山へと続く山々。北西には、福井県境の野伏ヶ岳・雄刀山・願教寺山へと続き、これらの山並を収斂し、その頂点に冠雪の白山がそびえている。白山を中心の一つの完結した神聖な世界をつくっているかのようだ。

山頂でのくつろぎの時間はまだたく間に過ぎていた。雲はすっかり消滅し、太陽も高くなって、うたた寝でもしてしまいたいような暖かさである。限りなく広大な地に抱かれているような心の和みをしる

#### ▲参考タイム▼

白鳥高原スキー場駐車場7・40↑登山口  
7・50↑スキー場リフト終点地8・30↑  
黒沙門岳9・30(昼食)11・20↑スキー  
場リフト終点地12・15↑登山口12・45↑  
スキー場駐車場13・00  
▲地形図V2万5千1石徹白

がするのだが、これらの樹木は身の丈を低くし、積雪期には雪の下で保護されて厳しい寒さをしのいでいる。  
見上げる本峰は、双耳峰のような姿で優美な稜線を東西に走らせている。いったん東のピークへ登り、山頂へはさらに西へ進むのだろうか。四囲の山々を視界一杯におさめながら、風吹き渡る頂稜線を歩く……そんな期待に心が弾む。  
道はやがて一気にくんだり、すぐ登り返して山の肩に至る。肩からは本コース一番の急登が続く。樹木がほとんど消え、一面に茂るチシマザサも背が低いいため、

一歩一歩の歩みが高度感を増し、なかなか爽快だ。  
傾斜がゆるくなって東のピークに到達と思ったら、何とここが山頂であった。「エー」と心のなかでかすかに叫び、西に走っているはずの稜線などを見廻してみたが、周囲はササのなかに沈んでいた。  
2等三角点の山頂には白く塗った木の標柱が立ち、横面に「白鳥町森林組合グリーンバイロット」と記されている。グリーンバイロット有志の人々により道が切り拓かれるまで、この黒沙門岳は登り

にくいやぶ山であったようだ。  
木立のまばらな山頂は、360度の展望である。南に、奥美濃の山々が重畳と続いている。まだオレンジ色を残した光茫たる空の下に、何重ものシルエットを見せている。西には、はるかに荒島岳が浮かんでいる。少しずんぐりとした姿ではあるが、冒険に満ちた山容は見応えがある。  
黒沙門岳は奥美濃の山である。奥美濃の山々の北の端にあるという位置関係から、私は奥美濃の山々の大展望を楽しみにしていた。しかし、黒沙門岳の神節は

## 山と高原地図シリーズ

定価750円(税込)

※ 利尻・蘭島・新島 阿蘇(特 行予定)	35 白馬北アルプス
1 ニセコ・羊蹄山	36 奥美濃・奥美濃北アルプス
2 大雪山・十勝岳	37 立山北アルプス
3 十和田湖八甲田 奥山	38 上高地・穂 穂高北アルプス
4 八幡平老母山・林道	39 飛騨守屋北アルプス
5 霧野・早池峰	40 高尾山
6 霧野・早池峰	41 中央・向アルプス線
7 霧野・早池峰	42 木曽駒・空平岳北アルプス
8 霧野山	43 甲斐駒・北岳南アルプス
9 霧野・北岳三山	44 穂高・赤石 穂高北アルプス
10 霧野山	45 白山
11 霧野・赤石 安曇太良	46 立山・伊吹・穂高
12 霧野・穂高	47 御台岳・峰ヶ岳
13 日光・日光山・日光	48 比叟山系
14 尾瀬	49 霧ヶ峰山
15 越後三山	50 霧ヶ峰山
16 赤川崎(霧ヶ峰山・立山)	51 京福西山
17 志賀高原 霧ヶ峰	52 北嶺の山々
18 妙高 戸隠	53 六甲・奥平・奥高
19 軽井沢・流洞	54 霧ヶ峰山系・二上山
20 赤城・奥平・流洞	55 金剛山・心越山
21 西上州 妙義	56 妙高高原
22 御台岳・妙義	57 大蔵山系
23 奥多摩	58 大台ヶ原・大形谷・奥高
24 大谷地蔵湖	59 赤石・御台岳系
25 奥秩父1群の山系	60 赤石・御台岳系
26 奥秩父2群の山系	61 大山 霧ヶ峰
27 奥平・戸隠	62 田代山系
28 戸隠	63 石碓山
29 妙義	64 霧ヶ峰の山々
30 伊豆	65 九郎 霧ヶ峰
31 霧ヶ峰 富士五湖	66 赤石 霧ヶ峰
32 八ヶ岳 霧ヶ峰	67 奥美濃 霧ヶ峰
33 霧ヶ峰 霧ヶ峰	※ 奥美濃 阿蘇(特行予定)
34 北アルプス新刊	

※昭文社の「山と高原地図」は年毎更新して発行されます。この行の標はなるべく最新版をご使用ください。また、この行の標はなるべく最新版をご使用ください。また、この行の標はなるべく最新版をご使用ください。また、この行の標はなるべく最新版をご使用ください。

## 昭文社

株式会社 昭文社  
本社 東京都千代田区九段北4-2-11  
電話03(3262)2141(代)〒102-8238  
支社 大阪市淀川区西中島6-11-23  
電話06(6303)5721(代)〒532-0011  
営業所 札幌・仙台・横浜・千葉・浦和・立川・新潟  
金沢・静岡・名古屋・京都・広島・福岡

連載

三角点を訪ねて ③

# 丹波・丹後地方の最高峰・三岳山

みたりさん

## 丹後

### 磯部 純

三岳山の五輪塔



のびのびになっていった「点名堀切」から三岳山への尾根歩きがやっと実現した。京都府下はもちろんのこと、近畿全域の500以上の三角点ほとんど踏んだという三角点痼疾患者の友人が、この尾根を歩いたことがないというだけの理由で付き合ってくれたからである。メンバーは3人。

三岳山は京都府北部の丹波・丹後地方では一番高い山で、京都府下21番目の標高を持つ山である。福知山市の西北、大江山峠の西南にあり、丹波・丹後の境界に位置する。山は後行者の開基になると伝えられ、山岳信仰の場としても長く続き、当時は女人禁制だったという。

山名はその昔、源頼光や坂田金時等が大江山の鬼退治へ向かう前、三岳山山頂近くにあった蔵王権現社へ詣で、大江山を偵察したことから「見立山」とも呼ばれたことから名付けられたという説もあるが、山の尊称である御岳山から付けられたというほうが本当かも知れない。

三岳山だけだったら、喜多または野原の集落から整備された登山道を簡単に登れるが、それではルート自体おもしろ味に欠け時間も余るので、いずれ登らなくてはならない「点名堀切」三角点を訪ね、尾根通しに三岳山まで歩くことにした。下野条から南に1ヶ所入った所に車を置く。まず「点名堀切」へ登り、尾根を西

ので、喜び勇んでその道を登るが、やがて道は消えてしまった。最初から道があるとは期待していなかったもの、案に発れるとヌカ並びさせられたぶんだけ疲れが倍加したような気がしてならなかった。

谷の中間尾根へ取りつく。尾根は見上げるばかりの急坂。南面が自然林、西斜面は植林された杉林でその中間を登ることになる。登りやすそうなのを遠くでは上へと歩体を持ち上げる。車を降りてから20分程度歩道を歩き足慣らしをしたとはいえず、この急坂の登りは足が痛くなる程度、とうてい先を登る鉄人の健脚にはつ

いて行けない。後ろを歩く2人はブツブツ文句を言いながらマイペースでの巨連びだった。

ツラ谷入口から30分の登りでやっと三角点に着いた。見ると、先着の彼はすでに店を広げエネルギーの補給中。後続の2人は汗だくでハアハアと思が上がっているというのに、涼しそうな顔をしているではないか。このような強い人といっしょに登る時には、必死になってついて行こうとするとバテてしまうので、マイペースを保たなくてはならない。

三角点「点名堀切」標高820.5m。杉林のなかに立っていて、西の自然林がわずかに明るさを取り入れているだけだった。標石は北を向いていて西へ20度傾いている。あまり人が訪れていないのか、深緑石が東西南北にしっかりと残っていた。暗い林のなか、何がなにいらぬのかカァーカァー鳴いているカラスの鳴き声がいやに耳につく。

20分程度休憩した後、三岳山へ向け出発する。三岳山までの尾根には二つの大きなピークがあり、約300mの標高差の登りにはさらに幾つかの小さなマップダウンがある。だれかが歩いたのか足根に

南にたどり三岳山まで登ろうというもので、標高差300mのタラタラ登りとなる。二つの三角点を踏み、戻って来て時間も十分残るはずなので、その後、近くの天ヶ峰(692.8m)へ登ることを申し合わせて出発した。

まず下野条集落を経て村道を北へと向かう。以前、彼がこの三角点に登った時には坂浦トンネルの南から取りつき、三角点から東にのびる尾根を登ったとのことだったが、今回は谷を少し入り、三角点から東南にのびている尾根を直登することにした。地形を読むとかなり急登になると予想される。

この谷でゼンマイを探っていた老夫婦に谷にのびている道の行く先を訊ねると、この谷は「ツラ谷」と呼ばれていて、三岳山まで道が通じているとのことだった。

はかたりしっかりした踏み跡がついていた。やまごきを覚悟していただけに、気が抜けたような気がしないでもない。単調な尾根の登りが続く。この尾根は境界尾根でもないのに尾根の東側が植林の杉林で西側は雑木の自然林となっていた。それもピーク?88付近近くになると東斜面にも所どころ自然林が姿を現す。このあたりまで登ってきて初めて両側の杉林、自然林から解放される。時おり、林の間から三の標石が見えてきた。

その一方、この時期には目を和ませてくれる花などもなく、気の休まることはなかった。山頂近くになりネマガリタケに囲まれたことを除けば、確かな登りといえてよく、山頂へは12時過ぎに到着。すぐさま昼食とする。まさに春そのものの闊気だった。

山頂広場の南端、下山路のすぐそばに金光寺の院の名残である高さ60cm程の五輪塔が立っていて、その北側にきれいな三角点を立てていた。三岳山三角点、標高839.2mである。三角点は北向きだったが、真北でなく10度東へ振っている。石柱は三角点の「点」の字が15度も上に飛び出していた。広場の北端には大



大きな反射板が立っていて、唯一、開けて  
いる境界を透っている。もし、反射板が  
なかったら、二国山・磯山を始の丹後  
半島の山々をバックに三岳の姿を撮る  
ことができたろうに残念でならない。ま  
た、その昔、藤原光が遠く見たという大  
江山の姿は杉の林に遮られ、全く見るこ  
とはできなかった。

山頂には雲を這っている人が一人いた  
が、やがて、男女二人連れ、子供連れと  
次々に登ってきた。しかし、登りきった  
所にある五輪塔に目をやっても、三角点  
に目を向ける人はだれひとりいない。一  
般のハイカーたちは三角点などには全く  
関心がないと言っていてよく、「三角点、三  
角点」と言っていて目の色を変えているのは、  
われわれ三角点前に覆っている者だけな  
のかも知れない。

山頂でゆっくりエネルギーを補給し、  
飲むものを飲んでから、表参道を下山す  
ることにした。10分もくだると蔵王権現  
をまつる真新しい屋根の三嶽神社が建っ  
ていた。

昭和二十三年に焼失して昭和二十九年に再  
建されたとは思えない程、麗新しく見え  
る。しかし、社の周囲の生えるに任せた

草や木がその裏返りを示している。階  
段を通る人々を両側から覗んでいる二匹  
の狢犬だけが時代の移り変わりを見守っ  
ていたように思えた。

野原への分岐を右に見て、山を越くよ  
うにしてくだる。道は広くしゃかりとし  
ている。楡林からナラ・カエデ・トチ・  
クヌギなどの明るい自然林の尾根を過ぎ  
ると再び杉植林の広い尾根道。やがて、  
尾根が細くなると金光寺の墓地の橋に出  
る。その墓地を通り「三岳山の家」へ着  
いた。山頂からわずか40分足らずの下り  
だった。

この金光寺は千手院と号し、高野山真  
言宗派に属して、本尊不動明王をまつ  
ている。平安・鎌倉時代には、当地は延  
暦寺末寺妙香院跡領佐々岐主で、三岳  
山頂近くにあった蔵王権現別当寺も妙香  
院の支配下にあった。また、山頂には金  
光寺の裏の院が建立されていたという。  
それが、いつ、どのような事情で高野山  
宝戒院末寺になったかは明らかにされて  
いない。金光寺は建立から何度も火災に  
遭って、蔵王権現社自体は明治になっ  
てから、三嶽神社として分離したとある。  
その昔、女人禁制であった信仰の山も、

今では廣くして昔の面影は認めことはで  
きない。ただ、女人禁制も解かれ、三岳  
山ハイキングコースとして整備された道  
だけがしっかりと残されていた。「三岳  
山の家」からは長い杉道を歩き車へ戻った。

下山時間が早過ぎた時には天ヶ峰へ登  
ろうと申し合わせていたのだが、車まで  
の車道を歩いているうちに気が変わった  
のか、車に着くなり一人はサッナと着替  
えを始めてしまった。引き続き天ヶ峰へ  
登るつもりになっていた三角点前の二人  
は、ただただ、あ然とするばかり。「天  
ヶ峰へは車道を歩いても2時間かかるの  
で帰りましょう」とは、時刻はまだ14  
時過ぎだったが、最長老の言うことはき  
かないと仕方がないと不承不承に従い、  
後ろ髪引かれる思いを胸に収め、京へ向  
け車を走らせた。

(平成9年5月4日歩く)

- △コースタイム▽  
下野条(20分) ツラ谷入口(40分) 点名  
掘切(1時間35分) 三岳山(10分) 三嶽  
神社(25分) 三岳山の家(1時間15分)  
下野条
- △地形図▽ 方5千1三岳山

### 連載 比良を歩く ⑮

## 細川から武奈ヶ岳

秦 康 夫

武奈ヶ岳(1221.4m)は、比良山系の  
最高峰であるだけに人気も高く、登山路  
も各方面から拓かれていて、そのなかで、  
安曇川側から八幡谷と貫井谷に挟まれた  
西北稜を忠実にたどって頂上直下に達す  
る折川ルートは、登山者も少なく春夏秋  
冬、それぞれ趣の異なる雰囲気味わえ  
るゆかたコースである。

大型連休が終わったばかりで休みの  
人が多かろうと思っていたが、予想に反  
して京都バス出町のバス停は登山者で  
大混雑、7時45分発の折木村行きは二台  
も増発が出た。平・坊村・梅ノ木で大半  
の乗客が降り、残った客は一台のバスに  
ままとめられて鍾川には8時54分の定期

り少し遅れて到着した。昨年まであった  
細川バス停の車庫兼待合所の建物は、き  
れいに取り払われて跡形もない。従来細  
川止まりだった堅田からの江若バスが一  
昨年折木村まで行くようになり、車  
庫としての役目が薄れたためようだ。

9時10分スタート。今回の参加者は男  
女半々の16名。バス道を少し戻って八幡  
谷に架かる橋を渡り、左、斜めに登っ  
て行く簡易舗装の道路に入る。大きなフ  
キやナンシキウの若芽の青々とした集落  
を抜け、右に墓地を見るあたりから杉林  
のなかの地道に出会う。これが武奈ヶ  
岳へ入る細い山道に出会う。これが武奈ヶ  
岳への登山道で、木の杖に板書きで「武

奈ヶ岳へ」の表示がある。送電線の下を  
通り、稲の代わりに杉が植わっている、  
という感じの棚田のような植林の跡を通  
過すると登山路は二つに分かれる。溝状  
にえぐれた道をまっすぐ東に登れば尾根  
道に出る最短距離となるが、傾斜が非常  
に急で滑りやすい。このルートは敬遠し、  
阿から山裾を回り込む迂回路をとること  
にした。

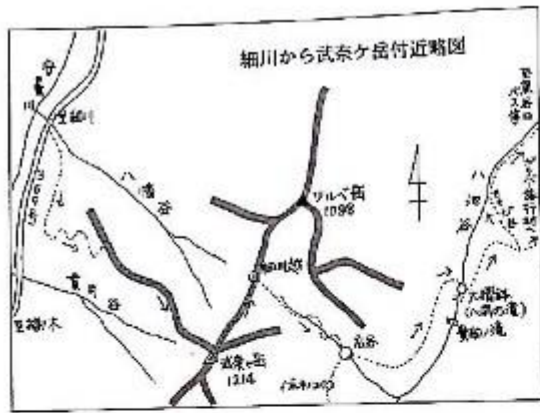
右上にのびる細い道は左右から木の枝  
が張り出してきたり、道を塞ぐ大きな倒  
木があったりはあるが、そう歩きにくい  
道ではない。石で組まれた水溜めの跡が  
あるところをみると、植林のために古く  
から使われていた道のようなのだ。薄暗い杉  
林のなか、広い尾根を刻むようにジグザ  
グを繰り返して、登山路は南東方向から次  
第に東に向かう。単調な登りを20分ほど  
我慢すると次第に広葉樹が目立ち始め、  
あたりの雰囲気明るくなってきた。朝  
日に輝く湯き通るような薄緑は、見るか  
らにやわらかそうなクヌギの若葉だ。大  
きな松の穴も多い。  
やっと思えば歩きの終わりで、先陣の滑  
杖になった頂上ルートの上端部に出会っ  
た。右をのぞいて行く道もあるがブッシュ



武奈ヶ岳西北麓にて

が多そうなので、やむを得ずこの水路のような道を行くことにする。急傾斜のうえ、なにもつかむものがない。時には手をついて四つん這いになったりしながら悪戦苦闘すること4、5分でこの道を抜け出し、なかなか尾根道に出た。ここで休憩。

冥さんが珍しいものを数個拾ってきた。松ボックリが真ん中の芯だけになっていて、長さは4寸位。リスかムササビのような齧歯類の動物が噛ったものらしい。九州などではエビノシッコポというそうだが、冬山でみるエビノシッコポよりこちらのほうが、形といい茶褐色の色といい、よほどエビに似ている。南アルプスで、多分カラマツと思われるもっと大きなのを見たことがあるが、比良で見かけたの



に見えるが、その向こうの琵琶湖はガスにさえぎられてはんやりとかすんでいる。縦走路を南へ数分歩き、武奈ヶ岳には11時45分に到着。細川を出てからの時間35分かかったことになる。

だれにも出会わなかった午前中から一転して、山頂周辺は登山者で大混雑、16名がバラバラに分かれて昼食をとった。

さいわい南方向にはガスがなく、時間の余裕もあるのでゆっくり展望を楽しむことにする。南の蓮葉山がすぐ近くの感で見える。花背峠の鉄塔の向こう、南西方向にはわれわれのホーム・グラウンドの愛宕山。南への縦走路、打見山の手前は台形状の比良岳、その左は烏谷山。右にくだつて行く尾根上には数ヶ月前に登った大岩山があるはずだが、なだらかなピークなので判然としなない。白滝山も同定できない。目の前のコヤマノ岳の山腹には木が繁っているが、その間に一ヶ所登山路が見える所があり、ちょうど数人の登山者が通過して行った。

1時間ほどゆっくりして縦走路を北にくだる。ガタガタの急坂でぬかるんでいれば苦労するところだが、まよふは土が乾いているうえに下ササもきれいに刈っており、30分ほどでスムーズに細川域におり立った。細川域といっても、ここから左の細川方面に降るルートがあったとは考えにくい。尾根を越えて西にくだれば、そこは急峻な八幡谷。谷の両側には壁が迫っており滝も多い。昔は谷道があったのか、または初めから道はなく後から名前だけ付けられたのか、疑問が解けぬ

は初めてだ。

広葉樹の多い自然林のなか、広い尾根の左側に登山道がのびている。登り始めの頃は、明黄色がみずみずしい新緑のトシネだった。高さを上げるにつれてだんだん緑も薄くなり、まだ葉を閉かない新芽が目立つようになってきた。初夏から春先に戻って行くような感触を味わいながら明るい尾根道歩きが続く。

標高700位のあたり、道が平坦になったところで休憩。木立を透かして左前方、東北東の方向に見える山はツルベ岳のようだ。ヒヨヒヨと鳥の声がかしましい。ここから登りが急になってきた。いままでのんびり歩きが一転して、木の枝をつかんだり岩角を頼りにしたり、ストックを持って米なかつた人にはきびしい登りがしばらく続く。落ち葉で滑りやすい急坂を、10歩行ったら立ち止まり、5歩登っては息を整え、スローペースで登ってゆくうちに広かった尾根がだんだん狭くなってきた。西サイド、左は八幡谷、右は貫井谷、いずれも沢登りの人気ルートである。

道は尾根の右寄りになり南側の展望が開ける。ブナの木が目立つようになる頃、

いままでも南東に向かっていた尾根が右(南)に方向を変え、武奈ヶ岳からツルベ岳に至る縦走路の稜線が左手に見えてきた。杉の繁るツルベ岳(1098m)の青黒い山頂よりまだ少し低い。小休止して上を見上げると、青空をバックに白いコブシかタムシバの花が数輪輪っけている。木の幹には、キツツキの作ったまん丸の穴の下に大きなサルノコシカケもある。

細川を出てから約1時間経った。南に向かってまだ登りが続く。シヤクナゲは花も実もつけていないが、その代わりにイワウチワがポツポツと咲いている。稜線を占拠する巨大な台杉を避けて右から廻り込むと、南に貫井谷をへだてて御殿山コースの西南稜が見えてきた。小滝木帯のなかに、クマザサが混じるようになると主稜線は近い。可憐なイワウチワの群落を眺めながら、尾根上の細い道を東南東にたどる。そのうち、ほとんどクマザサばかりになり、隠れてしまった道を懸命に足探りで進むと、数分であっけなく縦走路に飛び出した。

ぱっと展望が開けて真先に琵琶湖と伊吹山が目に入るはずが、あいにくの曇り空。眼前のリトル比良の稜線は鮮やか

ままわれわれは指導標に従い、右の広谷方面におりる。

粘土質の滑りやすい道をくだると、だけれが「比良の尾根」と名付けたスゲ原の湿地帯に入り流れが出てきた。めずらしいイワナが泳いでいる。このあたりイワナがいるという話は聞いていたが、姿を見たのは初めてだ。上流に頭を向け口を開けてユサの姿を求めている。大きさは20センチくらいか。敏感なサカナなので、人の気配を感じるとすぐ姿を隠してしまはずだが、われわれが近くでしゃべりながら見ているのに全然気がつかない様子。春の陽気に誘われて、警戒本能も春眠をむさぼっているようだ。

八洲ノ滝の源流を、左に右に何度も渡り返すあいだにも女性たちは、エンレイソウだ、ショウジョウバカマだ、ミヤマカタバミ(？)だ、と花の観察に余念がない。右岸に赤い屋根の小屋が目についたので、流れを渡って見に行くことにした。「ヒョウテ消道荘」という立派な山小屋だ。すぐ下流にも「ヒョウテK.O.Z II」というきれいな小屋がある。道は左岸についており道標もそちらにあるが、右岸に出て山小屋の前を通って行くほう

が歩きやすい。登山道もすぐ先で右岸に渡っている。

最後の徒歩では、何人かが靴下を濡らしてしまつて大騒ぎ。左岸へ渡つた所に  
あるはずの宝酒造の広谷小屋は、きれい  
に取り払われて蘇形もなく、宝酒造の一  
升桶だけが一本、ころりと転がっていた。  
ここから1、2分で道が分かれる。最近  
架け替えられたばかりの新しい橋を渡つ  
て右に行けばイブルキノコバ・八雲ヶ原  
方面だが、われわれは「大楯峠經由旅行  
村」の案内標識に従ひ、ササを分けてまっ  
すぐ東に入る。入り口の所だけは少し分  
かりにくい、すぐ明瞭な山道が現れる。  
始め左岸沿いの道は徐々に沢筋を離れ、  
左の山に入つて行く。

ツルベ岳から南東に長くのびたナガオ  
尾根の山裾を、ゆるやかな登りでぐるり  
と廻り、尾根をひとつ越えたあとはほぼ  
下り一方となる。この道も変化があつて  
なかなかおもしろい。イワカガミヤイワ  
ウチワ・シロウジ・ウバカマが咲き乱れ、  
奇妙な形にねじ曲がった台杉がある。数  
本の木を供連れにして根こそぎ倒れ、道  
を塞いでいる大木もある。繁殖のシイズ  
ンとあつて小鳥たちの鳴き声もかまひす

しい。はるか下のほうからは八洲の海の  
潮音が聞こえてる。なんといつても下り  
道はありがたい。登りのしんどかったこ  
とを思いだし、行きは地獄、帰りは天国  
などと言ひながら、ワイワイガヤガヤと  
くだつて行つた。

右に分かれるオガサカ道方面への分岐  
を過ぎると道は悪くなり、最後の急坂を  
クナリを頼りにおりて、八洲の池に入る  
交流のオウギ谷に出た。上流にはピンク  
の花を散輪残したシククナゲが小さな池  
におおいかぶさつてゐる。ここでいった  
ん左岸に渡り、石を飛んで右岸に渡り返  
すと間もなく大楯峠に到着。大きな池に  
落ち込む広いナメ滝の白が、周囲の緑に  
映えて鮮やかだ。波打つて落ちてくる大  
きな白い布のように見える。ここで最後  
の休憩。

丸太の橋を渡り山道が終わると、あと  
はバス停鹿ヶ瀬道までの長い退屈な林道  
歩きが一般的だが、今回は少し趣向を変  
えて別ルートを行くことにした。ガリバー  
旅行村の手前に、梨ノ木林道から分かれ  
て左におりる立派な遊歩道がある。数分  
でおり立つた所は通称モミジ谷(登山地  
図では砂谷)。八池谷の支流の短い谷だが、

名前の通りモミジの木が並木になつて通  
なつており、一帯は公園のように整備さ  
れている。秋の紅葉は見事だろつうが、な  
んと、いまでもシイズン臭つ盛りのよう  
に赤くなつてゐる木が数本あつた。巨樹  
するには絶好だなあと思つていたら、そ  
の通り、のんびりと堤防の上に寝転が  
つてゐる人が現れたのにはびっくりした。

モミジ谷は間もなく八池谷(鴨川)に  
合流し、川沿いの林道に出る。あとは約  
30分歩いて三谷口のバス停には16時頃着  
着した。

(京都北山グループ例会・  
平成11年5月9日歩く)

△コースタイム▽  
細川バス停(10分)武奈ヶ岳への道標を  
経て直登路と迂回路の分岐(20分)直登  
路の上端との合点(20分)ピーク70  
6のあたり(50分)尾根が両に曲がる  
謂(30分)武奈ヶ岳(25分)紅川越(35  
分)広谷(50分)大楯峠(30分)モミジ  
谷(30分)黒谷口バス停

△地形図▽2万5千1北小松  
昭文社II「北良山系」

## 連載

1等三角点峰(500m以上)548座完登の記録(第18回)

# 青森と秋田の山旅

坂井久光

平成元年5月29日、安家の黒森山から  
石師へ向かつて下山していったところ、狭  
医の車が通りかかり、龍泉洞まで乗せて  
もらった。お礼を述べて、龍泉洞を見学  
した。この鍾乳洞は、山口県の秋芳洞  
にも劣らぬ巨大なもので、内部も広くて  
清流が流れ、石筍や鍾乳石がたくさん  
ある。観光客も多く名勝地となつていて、  
売店・土産物店・食堂があつた。

次のバス停の温泉ホテルへ泊まるうと  
行つたが、1泊が1万5千円と高いので  
返却し、バスで盛岡へ行き駅前のカプセ  
ルホテルで泊まった。

翌30日、田川の農業試験場の北川氏を  
訪れ、長湯内岳・八幡岳・烏帽子岳の案

内地図や説明を受けて盛岡に戻り、特急  
で野辺地へ。長い車道を数回やサントリ  
社の橋を通り、谷沿いを登つた。途中で  
黒門温泉への分岐を過ぎて、神社、無縁・  
テレビ塔の林立する烏帽子岳(720m)  
山頂へ着いた。展望絶景で、眼下に野辺  
地湾、下北半島や津軽半島、及び青森市  
街を望み、向に八幡岳や先日登つた三ツ  
岳を望んだ。八甲山山や岩木山も残雪の  
姿が美しく眺められた。しばらく休んで  
下山。町の神社前に自衛隊の通信隊が演  
習に来ており、コヒーを駆走になつ  
た。途中も90分の三角点を経て黒門温  
泉まで遊歩道を通つた。途中ヒバの純林  
があり、シラネアオイの紫の花が咲いて

八幡岳山頂



いた。シナノキ・サワグルミなどの北方  
の植物が多く見られた。マカドはア  
イス語で山の麓の沼(ト)の意とか。約  
二百年前権が鶴を見て発見したとか。日  
木一の単葉葉節門のあるよい温泉で、小  
学生が修学旅行で泊まっていた。

翌31日、バスで野辺地へ行き、南部縦  
貫鉄道に乗り七戸町へ。タクシーで地図  
の旧登山口の峠の黒居の所まで行き、  
崖道に近い踏み跡をたどつた。林道に出

て登ると幼杉の林で、谷を渡って山道に出て踏み跡を探しながら登って行った。やぶになったので右手に登ると道が上がっているのを見つけた。とんとん登って山の神や雨風洞窟所を通き、3等三角点からは道もよくなり、広い切り開きが平出に続いた。右に車道が上がって来ているのを見て登ると牧場が右手にあり、その先に登山口の駐車場があって案内図があった。残雪を踏んで登るとピークに小屋があり、戸を開けると中は神社で、畳が敷かれていた。避難小屋を兼ねている立派な神社だ。展望はよく、八甲田山や三ツ岳が見えたが、やがて曇ってきた。横のやぶ道をくぐって次のピーク1018の1等三角点へ向かった。始めはやぶだったが残雪の屋根道になり、快速に歩き八幡岳三角点へ着いた。

しばらく休んで尻根道を探しながらくぐり、やがて道らしくなると思ったら舗装道路の牧場に飛び出した。なおもくぐって行くのと八幡岳放牧場の看板のある国道394号線に出た。ダンプカーをヒッチしてラベンダーの里近くまで行って、歩いていると青森市内の印刷会社の常務木立忠教氏の車が通り、浅草温泉まで送

てくれた。喫茶店で名刺を交換してコーヒーを飲みながら、彼のなじみの旅館を紹介してもらって別れた。

翌6月1日、七戸駅前から青森市行きバスに乗り野内下車。新設の車道を通り、矢田から貴船川沿いの車道を歩いて東岳へ向かう地区の登山口へ行ったが、そこから先は道がブルに荒されており、雑木林の屋根に取りついた。槍が多い雨後の踏み跡程度の急坂を登って4等三角点を踏んだ。さらに奥のピークへ向かったが、ネマガリタケが出てきて右側の山腹をたどって進んだ。小ピークが多く、その先に反射板が立っているのが見えた。フキやイタドリ斜面を登ると北海電力のもので、3等三角点と新ハイの板があった。その先は立派な歩道が付いていて展望台の看板や青森市の標柱が00号ごとに立っていて山腹の西側においていた。南の東岳へはネマガリタケの濃密なやぶで踏み跡もない。がっくりして戻頭だったが下山した。石灰岩鉱山跡を経て林道終点に出て、宮田からバスで青森駅前のカプセルホテルで一泊した。

翌2日、JRで津軽新城に行き、ヒッチして奥氏の森へ。地図の登山口は新興

住宅地になっていて探しても分からない。知る人もあまりいなかったが、吉備杉さんから馬ノ神山なら梵珠山からで、奥氏の森から登路があると教えていただいた。梵珠山までいっしょに登り梵珠を撮って別れた。広い道を北へ進み、ブナやミズナラの林や杉林を通ったが、アツアツラッパがかなりあった。やがて西から車道が上がって来ていた。その先は峠で東へくぐっており、小広い先は踏んで林道が開かれていた。

先に進んで青森テレビの塔が建つ山頂の横を通って小道を登ると、切り開きに1等三角点(540m)があった。曇っていたので展望はよくなかったが、静かな山頂でしばらく外んでから峠の駐車場におり、洗濯物を干した。山菜採りの車をヒッチして長い林道をくぐって五所河原へ。五能線で弘前に行き、乗り換えて奥羽本線で秋田に行った。

秋田アルペンクラブ会長JAC会員の福田氏宅に行き一泊した。彼は今年農林省を定年退職して悠々自適の生活に入っていたが、近く中国へ遠征するため、荷物の梱包その他で忙しかつたとか。後で知ったが、その後中国で病死されたそう

だ。奥さんの光子さんもJAC会員で、今でも文通している。全く惜しい方で冥福を祈る。

翌3日、福田さんの連絡で、東京新ハイの高柳さん一行と田沢湖駅で落ち合った。田沢湖湖岸をドライブし、地元の人々の案内で登山口の駐車場に行った。30人程の女性の多いパーティと同行した。始めはよい道だったが、後は踏み跡だけのやぶっぽいコースを登って稜線に達した。そこからは新しい切り開きがあり、コブを三つ乗り越えて急坂を登りきると、小広い山頂で、櫓が建つ大仏岳(1167m)に着いた。測量のため昨年切り開きができたが、それまではやぶ山で迷宮のみの登山可能な山であった。展望広大で一同感激して登頂を喜び合い、休後後往路を下した。左運駅(秋田内陸線貨鉄道)で一行と別れ、明日の長場内岳へ登るため、青森駅でJRに乗り換え二ツ井町へ。タクシーで宿を探したが、泊員で仕方なくタクシーの宿泊所で一泊した。

翌4日、ブナ林観察会の車に乗せてもらい、長場内林道の二ツ井の十津林道のゲートまで送ってもらった。これもみな福田氏の計らいで、会員の二ツ井町の島

山氏を紹介してくださって、彼のお陰で同乗させてもらった次第である。ゲートで一行と別れて一人で小道を登り稜線に出た。地図を覗んで北上したが、地形が複雑で地図の林道終点を見誤った。北川氏の(富田)氏の指示の切り開きがあったのでたどってみたが、間違って西の登山口(3等三角点)に登ってしまった。地元の人登山者へ会って教えられ、あわてて下山した。集合時間の16時に間に合わせようと、近道をして林道に出ようとしたが、間違えて谷筋にくだってしまった。山菜採りの踏み跡をたどってようやく林道に出て小滝集落へ急いだ。途中林道に出る直前、車が奥へ向かうのが見えたが、寝たいて身体が動かす知らせられなかった。集落の斎藤宅へ行き、事情を話して車で奥へ向かい、村の品山氏の車と途中で会った。斎藤氏に厚く礼を述べ、品山氏の車で二ツ井に帰り、吾国屋で夕食を共にしてお礼を述べ、近くの湯ノ沢温泉の駒住荘へ送ってもらい一泊した。この温泉は肌で滑らかな泉質で、後に長野の「信州百名山」の著者、清水栄一氏と泊まり、藤里の駒ヶ岳へ登ったことがある。

翌5日、連日の登山の疲れと天候が悪

化したので、山形経由で福島することに決めた。二ツ井町の品山氏に会って厚く感謝の意を伝え、再会を約してJRで山形へ。氏は後年朝日テレビの百名山で、東北の名山ガイドとして放映されたことが二度あり、観られた方もあるだろう。途中、秋田で下車し、福田氏に経過報告を兼ねてお礼を述べ、次いで山形のJAC会員の斎藤善一氏を訪ねた。彼の友人で三休山を共にした写真家の坂野氏の本を見せてもらい、三休山の思い出や飯森山の登山状況等を話すと一泊した。

翌6日、ノータリンクラブの要請で千葉の加藤画伯(暁画堂)を訪問した。久しぶりに老齢の画伯と会い、なつかしい奥美濃の馬瀬川源流釣りや、ノータリンクラブ諸友の近況を語り合った。氏が吾利尻巨巖に泊まって描いたという、絵巻物を見せてもらった。東山魁夷画伯と同窓で、京都高等工芸学校卒業と聞いた。奥さんが病身で看護の日々とか。永寿を祈り辞し、次いで友成の田中二画氏と会って、今夏の北海道山行の件を話し合ってから福島した。(次号へつづく)

(文中の太字は今回新たに追加した山を示す)

# 大正池

山口 淳有

海上町の秋葉山麓、弘法堂から左折すると大正池へ向かう。道の左右にかつて海上に生きた人々の空き家を見ながら進むと、道は舗装が切れ坂道となるが歩きやすい。道の両側にはナリ・雑木などが生い茂り、所どころ杉がある。

海上町から500ほど歩くと、左手に細い道（1号橋）が鋭角にあり、その道を谷川に沿ってくだると大正池である。小道の付近にはモンゴリナラの大木・ホオ・アカシヤ・ササなどがある。

この大正池は長野県梓川上流の大正池（火山爆発によりできた池）に似ていることから命名（？）されたというが、こちらは砂防池である。大正池は海上の山々の砂防工事が進んでできた人造の池である。私たちが子どもの頃にはこの大正池は



大正池

なかった。そこは物見山から流れる卑な谷川であった。谷川の両岸は岩と砂山で、谷川の北には砂防のためにハンノキが植えられていた。そして川下にはミズパショウがあったが今はない。ところが、この池をマスコミが「すばらしい池」と騒いだのでいち早く有名（？）になり、毎日のように多くの人がつめかけて、「自然とはこのようなものか」と満足（？）をしている。何でもマスコミが騒ぐと、大衆はそれ（「娯楽」に引っかけ、それらを真実（たとえば自然）だと錯覚する。現代のおかしな現象である。

この大正池は砂防のためにできた人造池で、池の前方にはコンクリートの堰堤が見えるはずだが、人々は気がつかない。海上には自然の池など存在しない。江戸時代の海上には「サクラギ池」と「ニヅリハ池」があったが、これらも雨池（溜り池）である。

昨年、私はこの大正池を数回観察に行った。夏には名古屋から30代の家族連れがたくさんキャンプに来ていた。今の名古屋の住民から見れば、このような人造池と砂防林に、つかの間の自然の安ら

のである。

こういいたいわれをマスコミや大衆は知らない。そして県は県で、いまでは海上の森は原有林だから何をしてもかまわない、と考えている。オオタカが現れても海上の自然を考慮してはいない。

そして、この県有林海上の山々は、戦後昭和21年から25年にかけて燃料が不足したために、林の木々が伐られ、運搬に小学生が手伝われ、さらに小学生に植林までさせたのである。物見山・大正池の付近もそうである。

私もその薪運びと植林をさせられた者の一人である。そこで私と同じように薪運びや植林などをして友がなげいま黙認をしているのか？

したがって海上の森は、明治維新で山々の木々は陶業の燃料として伐られヘゲ山と化し、そして戦後また燃料のために山々の木が伐られたということである。

そしていま万博により、また海上の山々にマスが入り、今度は岩をも壊し、木々も伐られる。現に鑛坑クレーターロードと鑛坑温泉へ行く途中の山肌を見れば、海上もこのようにして伐り取られることを望む者のみなさんにも見ていただきたい。

ざとでもいうものを感ずるのであろうか。私がかつて（子どもの頃）海上の山々をさまよったのは、生きることへの憧憬、あるいは物思いにふけるためであった。その場所のひとつがこの大正池付近であった。

当時は、砂山に赤茶けた花崗岩が飛び出し、モンゴリナラ・ツツジなどは幼かった。冬には狐が飛び出したり山猫がはえる場所であった。

もともと海上の森全体は、江戸時代は徳川藩の山々が多く、松・クヌギ・クリなどの大木が生い茂る山々であった。しかし徳川の世が終わることを見抜いたセトの陶業者たちは、海上から鑛坑・戸越峠・三國山に至る山々の赤松を伐り、陶業の燃料に使い果したのである。

ゆえに明治の頃には海上から三河、そして土板に至る山々はヘゲ山となり、見るも哀れな山というよりは、洪水が起ったらどうするかが問題となった。そこで大正時代から、愛知県林業、砂防、あるいは東大愛知演習林などにより、砂防林、塚堤、杉などの植林が地道に行われて、その効果が八十年かかってあらわれ、今日の海上かいわいの自然を取り戻した

のである。

「自然と観知」とは、いったい何であらうか。観知とは「深遠な道理の追求」の意である。山の中に草庵を作り、人々が出家・修行をしてこの草庵に住む。電気・ガス・水道を引かず、燈火（ローソクなど）のみで自給自足する「心のあるさと」とでもいふべき場所にしたらと私は考えている。

一方、万博推進派は、いまの自分の目だけで海上を見ているために、本当の海上が見えないのである。そういうものの見方が万博への不信感へつらなる。

私たちは一つのものごとについて、常に過去の歴史的事実からその本質（本質）をとらえてから、未来を語り考察しなければならぬと思う。この考え方が行政に欠けているし、さらに自然に対する総合的な教育（たとえば海上に住宅を作ったから、次に洪水が起ったらどうなるかなど）をもち合わせていない。

私はいま再びこの大正池にたたずき、昔日の谷川と、物見山の杉の植林を思いだし、文明への疑問を思うのである。

大正池付近は標高1600〜2000mの地域である。





よく見えなかった。  
休憩する場所も少ないので倒木を分けて南東へ下山道へ向かう。平常なら戒長寺へ20分程度くだれる道だが倒木が道を塞ぎ、谷筋は雨水で洗われて石コロが多く、皆近くも時間をかけて戒長寺へ到着する。

#### ④ 戒場山戒長寺(大字戒場(美野))

海拔560mの戒場集落の最高所であり、秘仏薬師如来を本尊とする戒長寺は、聖徳太子の幼願で建立され、弘法大師が伽藍を整えたとする由緒ある古寺で、現在は元治元年(1864)建立の本堂と庫裏・鐘樓門などを残すのみである。

本堂内には秘仏の前立の三丈六の薬師如来・千手観音坐像、日光・月光・思沙門天立像など、平安から室町時代の仏像が安置されている。鐘樓門の梵鐘は正応四年(1291)銘の重文指定で、「宇陀郡山辺郷 戒長寺薬師仏鐘也」と四面に十二神符を三体ずつ鑄出する。

本堂東側の戒場神社は神宮寺と推定されるが、大山孤命を祭神とするので、戒場山へ入山する人々を守護するために祭祀したとも言われている。江戸後期の陳

札や湯釜・金灯籠・供え箱の路には十五社大明神とあるので、伊勢・春日・熊野などの神々を招請したのであろう。神社橋の本木の太木と藤原朝儀のオハツキイチの古木は原指定天然記念物である。

#### ⑤ 篠畑神社(大字山辺三)

戒長寺の隣下東の東海自然歩道へ入り南南東へくだると篠畑神社がある。山辺三は近世の山辺東・中・西の三村を併せた広い大字で、神社は東山辺村の郷村であった篠畑村の倭姫命ゆかりの地である。

『日本書紀』垂仁天皇条に「倭姫は天照大神を鎮め坐させる処を求め、菟田の篠畑に詣る」とある。『大和風土記』逸文に「宇陀の郡篠畑の庄、御杖の神の宮、倭比売命 天照大神を戴きこの地に至りて三月を經、ついに神戸となしめ」とある。式内の御杖神社を御杖村神末の御杖神社と当社を候補にあげることが確定していない。

昭和十年に伊勢神宮や神武天皇奉贊の風潮が高まり当社も皇社に昇格し、伊勢神宮に倣って本殿を神明造として、天照大神を祭神に倭姫命も顕彰している。

### 〈山のレポート〉

## 日本一低い富士山

生駒 隆雄

富士山と言えば、日本一高く秀麗にして日本を象徴する山である。その富士山にあやかって、何々富士と名の付く山は日本中に数え切れない程ある。

日本は火山国だから、各地に火山による山が多く見られ、その中のコニーザ型の山が富士型と成り、なかでも、高くて形の良い山がその地方を代表して、富士山にあやかって何々富士と名付けられる。有名なものを拾ってみると、北から、

刈原富士(和歌山)・殿津富士(会津)・渡部富士(大沼)・津軽富士(岩木山)・南郷富士(岩手山)・出羽富士(鳥海山)・会津富士(磐前山)・八丈富士(八丈島)・越後富士(妙高市)・諏訪富士(諏訪市)・信濃富士(黒川山)・越前富士(白旗山)・若狭富士(若狭山)・伊予富士(新万石)・近江富士(三上山)・大和富士(額井原)・播磨富士(笠形山)・美作富士(白名山)・讃岐富士(鷲野山)

・伊予富士(伊予市)・豊後富士(由布岳)・豊後富士(湯田原)など。これらの山々は一応みな固有の山名を持ってはいるのだが、この富士の名称のほうが判りやすい山も多い。どの山もその地方を代表する山々で、著名な山が多く、日本百名山やガイドブック等で目にする山である。

私もこれらの山々は一応登っているが、山を見る角度によって様々に姿を変えるから、どこが富士だという形の場合もあるし、また無理やり富士と名付けた山もなきにしもあらずである。

ところで、遠野富士山と言えば日本一の富士の山、と高さを誇る山となるのだが、それならばと日本一低い富士山はと探してみると、何と標高376mの富士山が見つかった。

秋田県は大森村。ここは八郎湯を埋め立ててできた大規模灌漑の村で、干拓地のために地盤が海面より低い。そのほぼ中心地の「御幸橋」のたもとに海抜マイナス約4mの所に、3・776mの山が作られて「大湯富士」と名付けられている。この3・776mは、富士山の1000分の1の高さになり、しかも山頂は標

以降の10月の例祭には日の丸の御幣を掲げた童女が、倭姫が奉斎した姿を再現して餅や青物・魚類を神前に供える。

篠畑神社から国道165号線へくだり西へ10分ほどくだると、標高の低い神社がある。以前は倭姫命などを祭祀していたが、現在は本社同様天照大神をまつり、境内を公園風に整備して参拝者やハイカーのけっこうな休憩場所となっている。

#### ⑥ 葛神社から橋原駅(山辺三(戒場))

葛神社から天満台東へ上がりバスに乗れば橋原駅まで10分余で着くが、橋原町宮の美橋園で入湯休憩し、無料送迎バスで橋原駅への希望者が多く、国道の南下方に残るあを越え伊勢道を西へ向かう。室生ダムへ入る天満川の対岸、地藏山麓水際の溜れ地蔵へ立ち寄る。巨岩に大きい舟形を彫り込み、円形光背の1層大の地藏菩薩懸崖仏である。建長六年(1254)銘と二体の十王が線刻してある貴重な鎌倉時代の仏である。

美橋園まで歩いてそこで解散し、喫茶休憩や入湯と自由行動にした。

高0.1mに合わせである。この山は秋田県設計測量協会が、日本一低い山を作ろうと人工的に作ったものである。しかし、埋立地に重量のある山を作ったので、地盤沈下して予定通りの高さがないとの噂もあるそうだ。

JR奥羽本線八郎湯駅から大湯橋を渡り、干拓地の真ん中を一直線に男鹿半島に向かう道を3つばかり行くと「御幸橋」がある。そのたもとに「日本一低い山」の標柱と共に「大湯富士」の石碑が立っている。看板のほうが立派で、芝生張りの山は単なる築山に過ぎないが、けっこう村でも観光名所にしていて、「大湯富士」後援記念記帳ボックスの中のノートを開いてみると、1日1件当たりの記述があった。

22段の階段を登ってみる。標高は低いが一面田園で、展望は広がっていた。もちろん国土地理院には認められてないから、地形図に記載はないが、私のカーナビには記入されていた。ちなみに平成7年3月3日測量の日の銘があった。地形図上の日本一低い山は、大板天保山(標高4・5m)と等三角点である。(参考資料) 地図測量史外

# 磯ノ浦から淡嶋神社へ

松永恵一

## 雛まつり

美しい日本の国を彩る年中行事、雛祭り。わが子の健やかな成長への願いをお離さまに込める。

あかりをつけましょ ぼんぼりに  
お花をあげましょ 雛の花  
五人ばやしの 笛太鼓  
今日はたのしい ひな祭り

お内裏様と おひな様  
二人ならんで すまし顔  
お嫁にいらした 姉様に  
よく似た官女の 白い顔  
「うれしいひな祭り」

山野三郎作詞・河村光陽作曲

幼い日の思い出が鮮やかによみがえる。

十百の節句に、女兒のいる家で雛壇を設けて雛を飾り遊ぶ祭りが、書物の上に現われてくるのは寛永二年(1625)3月4日の「お湯殿の上の日記」の記事。「中宮の御かたより、ひいなをたいの物、御たるまいる」とあり、それで酒宴を催したことが記されている。

上巳は古くは「じょうし」、江戸時代からは多く「じょうみ」と呼んだ。上代この節句には宮中で節宴を挙げ、供物をし、随隠・曲水宴が行なわれた。供物には桃花餅・豆餅、のちに桃花酒や白酒が用いられた。

平安時代、ふだん玩ぶ人形を「ひいな」と呼び、「ひいな遊び」と称して、少女を写した人形にその館や乗り物・食器なども使って、今日のままごと遊びのようなものが行なわれていたことが、『源氏物語』『栄花物語』『狭衣物語』などに記されている。

3月3日を中心とした、穢え浄める行事と、「ひいな遊び」が結びつき、江戸初期に現在の雛祭りとなったのであろう。雛人形の立派な雛流しのひとがたの姿の名残であろうし、座った姿の内裏様はひいな遊びの人形の姿の続きといえよう。

正月7日の「八日」、3月3日の「上巳」、5月5日の「端午」、7月7日の「七夕」、9月9日の「重慶」の五つの行事は「五節句」として定められていた。雛祭り、桃の節句と呼ばれている日が「上巳の節句」。「上巳」とは「旧暦の3月最初の巳の日」のこと。

古来中国では、この日に青い草を踏んで川に入り身を清め、酒を酌み交わして穢れを祓う「遊春」という習慣があった。やがてこの習慣は「曲水の宴」へと発達する。我が国も古くから穢れを祓っていた。「はらえ」といわれるこの習慣は、自分の持ち物を神に仕える人に渡し、浄めてもらうというもの。この「はらえ」が中国から伝わった「曲水の宴」と習合

## 淡嶋神社

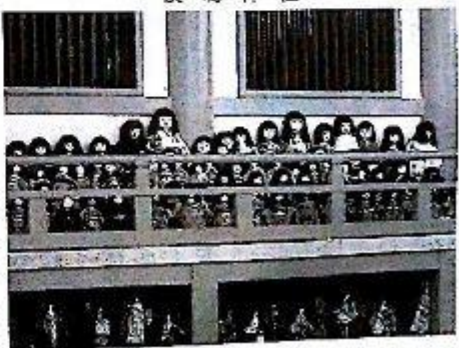
伊弉那命と伊弉諾命が天の御柱を廻って国生みをするとき、伊弉那命から先に河をかけたしまったため、子ともは怒められない水鏡子と淡嶋(加太友々島の神島といふ)が生まれた。神功皇后は三輪出兵からの帰途、瀬戸の海上で激しい嵐に遭われた。「船の苦を海に投げ、その流れのままに船を進めよ」とのお告げがあり、たどり着いたのが友々島。少彦名命と大己貴命がまつられていた祠に、持ち帰ってきた宝物を奉幣された。

後、仁徳天皇が対岸の加太の地に遷され、祖神の神功皇后(皇長足姫命)を合わせまつられたという。

この神社の本質は女性の信仰と深泊神信仰。淡嶋神は天照大神の第六番目の姫。十六歳で住吉神に嫁いたが、婿人病にかかったため、十二の神宝とともに塚から空船に乗せられた。翌年3月3日に紀州の加太淡嶋に流れ着き、まつられたという話も伝えられている。

少彦名命は、医薬の神様。婦人病や安産祈願など「女性のための神様」として信仰されている。

淡嶋神社



する。「上巳の日」に「ひとがた・かたしろ」で体を撫でて自分の災難をうつし、海や川に流し捨てる。現在も各地に残る「流し雛」の習俗はこの流れをくむ。

この「はらえ」のための道具であった「ひとがた・かたしろ」は、子どもが無事な成長を祈る風習と一体となって、装飾的な人形へと移り変わる。雛人形を飾り、菱餅や桃の花を供え、白酒でお祝いする行事は、実は江戸時代の中頃に始まったものだ。

## 雛流しの神事

3月3日、境内は人々の熱気でむせかえる。それぞれの願いや思いを胸に、関西はもとより、全国から境内に集まった女たち。

正午、雛流しの神事がおごそかに始まる。供養のためにおさめられたお雛さまは、願い事を書いた人形とともに、二隻の白木の雛流し船に乗せられる。

穏やかな春の海に千羽鶴がまかれる。それは神の国へと続く道。お祓いを受けたお雛さまを護衛した白木の船が、しずしずと進んでいく。女たちの思いのたけが込められたお雛さまが、ぎゅーと積み上げられている。

先導する船に引かれたお雛さまは、沖へ沖へと向かう。波に揺られ、浮かんでは沈み、見え隠れする。波間に黄金色や朱色のおでやかな衣装がきらめく。

そっと手を合やす。まるで生きているかのようなお雛さまとともに、ひとりひとりの思いが神の国へと流れていく。

女の雛のうつむき給ひ波の間に  
山口督子  
雛流しがすむと加太には本格的な春がやってくる。



藤流しの神事

コース概観

紀伊半島の西端に位置する和歌山県・加太は、碧い空と美しい海に包まれている。加太は交通の要衝。奈良時代は大和を出発点とする南海道の終着点であり、また淡路島、四国方面への出発点でもあった。夏場には海水浴客やサーファーでにぎわう磯ノ浦から「藤流し」で知られる淡路神社へと、春つららの福船散歩に訪れてみた。



につけていと恋の苦しみが忘れられるとの俗信があった。「幾歳月が経ようとも、あなたのことを忘れぬように忘れることは決してない」と抱くことなき愛への決意を詠っている。

もう一基の歌碑が、友ヶ島、海水浴場、加太漁港を一望に見渡せる休庵村・加太研発センター（城ヶ崎荘）の前庭にある。

淡路舟 沖漕ぎ来らし 妹が島  
形見の浦に 鶴附ける見ゆ  
『万葉集』巻七、一九九作若木不詳

薬を刈る舟が沖を漕いで来るらしい。

南海加太線（和歌山市駅始発）磯ノ浦駅下車。駅のまわりには何も無い。目の前は海。この海でサーフィンの世界大会が開催された。左は一面海、右は山。この海岸沿いを延々と歩いて行く。

潮が引いたばかりのちよっと湿った所を歩く。とってもいい感じ。

春の大潮の時期は、一年のうちで最も潮位が下がる時期。昔説はおられないような所まで濡れずに行くことができる。

海岸近くの水深1メートルの所に多数群れているのが春の磯の代表アメフラン。マダコと同じ軟体動物の仲間。黄色い紐状の卵塊はウミソウメンと呼ばれる。人形もまばらな海。海岸で漂着物を探すビーチコーミングを楽しんでみよう。

運がよければ、異国からの漂着物や海底からの贈り物を見つかることができる。

赤錆びた鉄骨が横たわっていた。座敷しつち捨てられた船の残骸。錆の鎖が縮み縮みしていた。

潮の干満により周期的に出現を繰り返す水たまりのことを潮たまり（タイドプール）という。大きな潮たまりの中にあつた石をひっくり返してみた。石の下から

妹が島の形見の浦に鶴の飛んでいるのが見える。

淡路舟とはワカメなどの海藻を刈る舟で、メカリ舟ともいう。目の前に広がる海。沖に浮かぶ島。高い鳴き声を響かせながらゆったりと飛び行く鶴の群れ。雄大にしてのびやかな海の情景を淡々と詠い、日ごる海を見ることのない大和の国の人の、海に対する感動とあこがれを詠い上げている。

妹が島、形見の浦については不明な点が多いが、『紀伊國名所図繪』は、友ヶ島を「土俗これを言がしまといへり古名妹がしま」と記し、形見の浦は加太の海岸とする説が有力である。

八本の腕をもち、茶褐色の縞模様をしたヤツアヒトデが姿を現わした。インスジエビやライソガニなどは身を隠す場所を探して大急ぎで逃げてゆく。小型の巻貝の殻を住居にしているホンヤドカリがいる。あたりの岩場にはカサガイの仲間のロメガカサ、そのまわりには多くのイワフジツボが着いている。ひっくり返し大石は、観察が終わった元の状態に戻しておく。じっと目を凝らしていると実にたくさん生き物が獲れていることに気づき、つい夢中になって時間の経つのを忘れてしまう。

右側が断崖絶壁に変わると田倉崎。周辺は万葉の昔謡等の浜と呼ばれた。磯遊びもここでおしまい。崖を登って道路に出る。田倉崎灯台の下の海岸沿いに万葉歌碑が建てられている。

紀の國の 飽等の浜の 忘れ貝  
吾は忘れじ 年は経ぬとも  
『万葉集』巻十一、二七九作若木不詳

紀伊國の飽等の浜の忘れ貝。その名のように私はあなたのことを決して忘れない。たとえ年は経ってしまおうとも。

忘れ貝とは一枚貝の殻の一方だけが残ったもので、恋忘れ貝ともいい、これ自身

内に飾っているとのこと。

宝物殿には、長い時代を静かに生き抜いてきた見事な雛人形が数多く残されている。その多くは紀州徳川家から姫君の初節句に奉納されたもの。爪ぐらいの大ききさしい遊具に精巧な彫り物が施されている。金銅造丸輪太刀（神功皇后奉納）と大円山形彫（藤原親王奉納）は国宝に指定されている。

潮風に吹かれながら夕日を眺める。すぐ前に友ヶ島、少し向こうに淡路島、太陽が紀伊水道に沈んで行く。大変美味しい海の幸を味わいながら、うっとりするように美しい夕暮れを楽しみたい。

▲コースタイム▼  
磯ノ浦駅（2時間）田倉崎（25分）淡路神社（20分）加太駅（25分）和歌山市駅（特急55分）南海難波駅  
▲地形図▼2万5千 加太  
▲費用▼  
南海難波駅→加太駅 930円  
▲問い合わせ先▼  
加太陽光協会 0734(58)00003  
淡路神社事務所 0734(58)0043  
磯ノ浦観光協会 0734(51)5821

美濃中山道を歩く

ほそくて  
細久手宿から御嵩宿

初級コース(★)  
杉本 高

江戸日本橋を発した中山道は、関東平野を通り唯木峠を超えて信濃へ入り、和田峠を超えて木曽路を通り、今や一大観光地となった馬籠宿の南で美濃国へと入る。

石畳の坂をくだった所にある落合宿から近江との区境近くにある今須宿までの間、渡合・中津川・大井・大森・細久手・御嵩・伏見・太田・鶴沼・加納・河渡・美江寺・赤坂・垂井・関ヶ原・今須の16の宿場を総称して美濃十六宿と呼ぶ。

このうち、大井(現在の恵那市)から御嵩までの間は、江戸幕府が中山道を定めた際に新たに拓かれた道で、そのほとんどが東西自然歩道となっており、歩道や

道標も整備されて自然がよく残り歩きやすくなっている。

出発地の細久手宿へは、JR中央本線の瑞浪駅から東濃バスがタクシーを利用する。

ただし、バスは日古小学校の登下校が主目的で、第2、第4土曜日と休日には午前中の便が運転されず、それ以外の土曜日でも、8時40分と11時20分の二本しか運転されていない。これらの日には、逆コースを歩き、細久手発16時30分のバスで瑞浪駅へ出るとよい。

細久手バス停で降り、来た道を戻る。この道が中山道である。明治の鉄道開通以降歩いて歩く人もなく、今では旧尾張藩木陣であった大黒屋が残る以外、宿場町の面影をしのぶことはできない。

15分程で集落を抜けると、日吉、愛宕神社の下で道が二つに分かれる。直進すれば平岩集落へ抜ける中山道で、東海自然歩道は右折し美濃源氏土佐氏ゆかりの名刹、馬元院を通って平岩へと至る。馬元院の山門は一見の価値があり、自然歩道を進むことをすすめる。

瑞浪山開元院は、嘉吉四年に僧月泉が時の領主土岐頼元の援助により創建したとくだつて行く。ここを藤木坂と呼ぶ。坂をおりた所が津橋集落で少し舗装道路を歩く。

やがて、再び竹林のなかを進むと約30分で味に飛び出す。ここが御殿場である。幕末の文久元年、皇女和宮降嫁に際して、休憩のための御殿が築かれた所である。右手の高台にあずま屋が設けられ、展望の良い絶好の休憩場所となっている。

くだり始めて最初の集落が護坂である。御嵩から細久手へ向かうと、急な坂が連続するため、歌を唱いながら坂を登ったと伝えられている。道端には噴清水が湧いているが、少し先に湧いている一番の清水とも、生水の飲用は避けるようにと表示が出ている。

この先の坂道は護坂の石畳と呼ばれ、江戸時代に敷かれたものを再整備したようである。テンプルやベンチも置かれ、ひと休みするにはもってこいである。

自動車道に出て少しくだると、右手の小高い所に鳥居が見える。これが耳の病にご利益があるという耳神社で小さな祠がある。

その先から右手にくだる坂が、牛の鼻欠け坂と呼ばれる坂で、岩盤を削った急

寺院で、東濃における曹洞宗寺院の中心であった。

今来た道を里へ戻り、直一峠を越すと平岩へ出る。平岩之辻で細久手から来た中山道に合流し右へ

進む、坂の途中から左側へ自然歩道は進む。ここから、雑木林のなかを歩く自然豊かな道となる。

西坂を登りきった右手の、三つに区分された石畳に秋葉三尊がまつられている。ゆるやかにのびる砂利道を進むと、やがて左側に「鎌倉街道へ一里」と刻まれた石標が復元されているが、往時の野道は草木の茂みに消え、跡形もない。

この先、鶴之巢一里塚の手前がある味の右側の松林のなかに、3等三角点(396.2m)がひっそりと埋れている。

やがて、鶴之巢一里塚が見えてくる。この一里塚は左右にすれて配置されており、塚には松が植えられ、岐阜県指定史



跡となつていく。

この先で、瑞浪市から御嵩町に入る。瑞浪市側が砂利敷の車道であったのに対して、御嵩町側は車の人れない自然の道となつている。市町境からすぐの所で、鬼岩公園への道と津橋集落へくだる道が分岐する。右側の津橋集落への道に進み、右手の石畳に石仏が安置されているのを過ぎると、やがて竹林のなかを

坂のため、荷を運ぶ牛や馬の鼻が、地面にこすれて傷ついたため、こう呼ばれるようになったと伝えられている。

坂をくだると、右手の山が土砂崩れのために無残な姿をさらしている。一部通行止になっているが、川の堤防をくだって舗装路を右折し、直進すると自然歩道に合流する。

自然歩道が国道21号線に出合った所に和泉式部の廟所と刻まれた石碑がある。

この先の信号で左折し、橋の三つを右折すると約30分で名鉄広見線御嵩駅に到着する。

駅前には、中山道みたび館(二階が郷土館になっている)や、蟹薬師で知られる願興寺がある。ぜひ立ち寄ってみたい。(平成11年10月30日歩く)

△コースタイム▽

- 細久手バス停(30分) 開元院(10分) 平岩辻(20分) 鶴之巢一里塚(30分) 津橋(20分) 御殿場(30分) 耳神社(30分) 和泉式部廟所(35分) 名鉄御嵩駅

△地形図▽2万5千1:10000

特選コースガイド②

丹波

### 兵庫丹波の

## 白山

初級コース(★)

慶佐次 盛一

加賀の白山にくらべると、547坪の標高はあまりにも低すぎるが、れっきとした白山の名を戴く山である。氷上町の市辺あたりから末を望むと、この白山と弘浪山が鋭く直立して登山意欲をそそられる。

白山の名の通り、この山も天文二年(1533年)に土地の豪族赤井氏が加賀の白山から御神霊を勧請して山麓に白山神社を創建、文禄元年(1592年)、山頂にまつたと伝えられる。昔は、八朔(陰暦8月1日)の祭礼には山を登る参拝者が遠くからでも来たと土地の人から聞いたことがある。白山の神は経緯び、下の病(病)の神として崇められ、病(病)

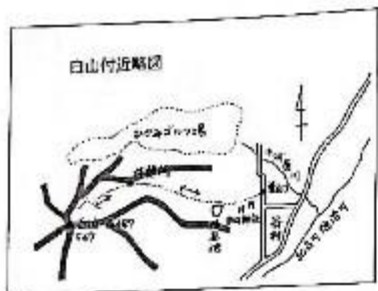
毒)は「笠」に通じるからと笠を供える習俗が今も残っているそうだ。

十数年前に登った時には山頂に倒壊しかけた白山神社の祠があったが、今は撤去され展望のいい頂に変わった。白山だけでは時間が余りすぎるので、「おさんの森」を訪ね、最後は日本一低い分水界の「水分れ公園」を訪ねるコースを紹介する。

JR福知山線栢原駅で下車し、タクシーでおさんの森へ向かう。駅からわずかな距離で入口に車を待たせておいた。近松門左衛門や井原西鶴の作品にも登場するおさんと茂兵衛の悲恋の物語の現場で、旧山陰街道の一角である。京都の酒屋の妻と、手代の茂兵衛が許されぬ仲となり、茂兵衛の郷へ駆け落ちの途中で、ここでおさんが喉を切ったためその声を聞きつけた役人に取り押さえられ、近くの河原で二人は処刑されたという。故川口松太郎直筆の「おさん茂兵衛を偲ぶ」の石碑が橋を跨う。小さな祠があり、恋愛成就の神として若者に慕われている。咳は「肺」からであるからと「肺病」にご利益があると信仰されて「灰」の奉納も見られた。おさんの森から白山登山口に着く。大

は尾根だが、実際には谷状になっている。道は植林帯を次第に傾斜を填しながらジグザグに登り、どうしたわけか都合目を飛ばしてり合目の標識が現れる。左へ折れて少し稜線をたどり、三水鉢から石段を登ると白山の頂上だった。

稜の台座が残り、西側に霧ヶ峰、その左に妙見山・笠形山が見える。東は足下に佐治川を流す、高見山・石戸山・白髪岳に松尾山・トンガリ山や黒頭峰・夏栗山・三嶽・小金ヶ嶽などが見え、南の方には遠く石金山まで見えた。



見飽きることはない展望を十分堪能してから元の登山口にくだり、タクシーを呼んで水分れ公園へ向かう。公園には大きな駐車場

もあり、車を降りて先へ歩く。正面には向山が壁のように立ちはだかり、北側の山肌は陸所に険しい岩を露出している。ここは、日本一低い分水界を観光の目玉として開発された公園である。高谷川に沿った桜並木の歩道をしばらく進むと、高谷川の水が日本海と瀬戸内海に分かれて流れる様子がよく分かるモニュメントが出来ている。

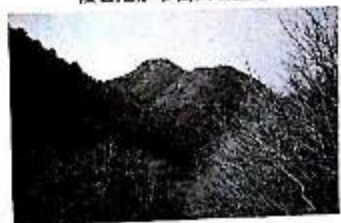
しかし本山の分水界は国道17号線に架かる水分れ橋付近で、標高約1000坪である。昔は「水分れ」は「身別れ」につながるって縁起が悪いと、婚礼の行列はこの橋を避けたという。モニュメントの前には、分水界を守るいそべ神社があり、その槽には水分れ資料館もある。さらに足をのびして、分水界を一望する展望台に立ち寄るのもいいだろう。

#### ▲コースタイム▼

JR栢原駅(タクシー約10分) おさんの森(タクシー約10分) 白山登山口(30分) 休憩所(30分) 白山(50分) 白山登山口(タクシー約15分) 水分れ公園・いそべ神社(15分) 石生駅  
▲地形図▼2万5千1000 栢原

きな案内板があり、香獣除けのゲートを開けて登山道に入る。龍荷神社を過ぎすと後谷池で1合目の標識が立つ。カッパが出るかも、とのひょうきんな看板もあった。ここから正面に白山がよく見える。

後谷池から白山を望む



以前は少し荒れた参道だったが、今は地元の篤志家たちが標識を立て安心して歩けるようになった。ただし、道の両側には「松茸山」の看板もあるから、その時季には遠慮したほうがいいだろう。合目が近づくと、右側に東屋風の休憩所が見え、立ち寄ってみる。まだ新しく、記帳ノートが備えられ、弘浪山が真正面に見える絶好の所だった。

小憩して先へ進むと「ちよっと休憩」の標識と、白山に訪れる野鳥の大きな解説板があり、左側の岩壁には苦むした不動尊像がまつられていた。池形園の登路

## KOBEの登山専門店

手作りザックの店です

新製品紹介

### ◎アルパイン サブ

○山小屋からの頂上往復に  
○軽量軽装のハイキングにコンパクトで軽量  
○サイドに長目のファスナーがあり、小物の出し入れに便利



- カラー レッド×ブラック
- ブルー×ブラック
- グリーン×ブラック
- 容量 20L
- 重量 450g
- 素材 USコーデュロン
- 価格 ¥4,500 (新ハイ価格)

—イモック山行くらぶ—  
春夏秋冬・シーズンを気にせず山・登山・名山を訪問します。詳細はお問い合わせ下さい。



## 神戸ザック

〒650-0077 神戸市東灘区大塚町91番1号  
TEL (078) 621-3851  
FAX 621-3528

静寂の山々

笠杉山と千町ヶ峰

中級コース(★★★)  
篠山 誠峰

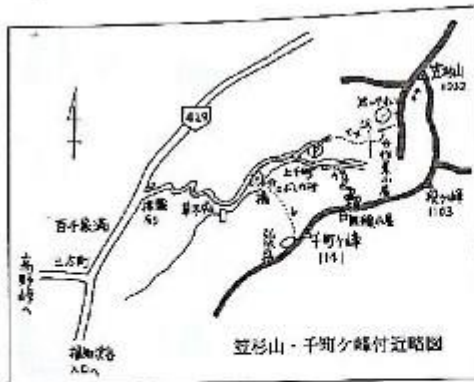
兵庫県六甲郡一宮町に位置するこの二山は、標高1000mを超え、山容もどっしりとした奥の深い山である。兵庫県尾道から昨夏刊行された『ふるさと兵庫50山』に千町ヶ峰がやっと紹介されたが、まだまだひと気の少ない山域である。笠杉山は以前に山岳月刊誌のガイドで紹介されたことがあるが、その書き出しがこの山をよく表現している。「笠杉山は播州高原・段ヶ峰の北側に置き忘れられたような山である」と。

笠杉山 (1032m・1141m)  
姫路から国道29号線を北上し、山崎町を經由して一宮町に至る。安積の信号で

た笠山のたたずまいに心を打たれ、下山の途についた。

千町ヶ峰 (1141m)

前述の「こぶしの村」の駐車スペースから、小鉄橋を渡る。この野外活動施設は個人で開設されたものなので、本館横に湧出している名水を汲ませただけ程度にして、けっして迷惑をかけないようにしたい。道は施設内を過ぎ、植林



右折、三方方面をめざす。福地溪谷の入口をやり過ごし、百千家南の集落で国道429号線から分かれて右に入って行く。

林道はジグザグに高度を稼いでいき、やがて草木ガムの上部に出る。この集落を過ぎてさらに奥へ進むと周囲が急に開け、「こぶしの村」の入口に到着する。道の右側に駐車スペースがあり、その奥の小鉄橋を渡ると、千町ヶ峰の登山口になっている。この集落が下千町で、さらに車道を進み上千町で道標に従い、左へ進路をとり終点の駐車スペースに着く。ここから登山支度をし歩き出す。

沢沿いの平坦な道を進み、小さい沢を渡ってクヌギ林を登り返すと作業小屋に着く。腕が突然現れ、こちらをしばらく見ていたが、やがて林に姿を消した。左へ進路をとり、また沢を渡り、植林のなかを進むと切り開かれて少し広くなった場所に出る。このあたりが迷いやすいが、右前方に進路をとり尾根に取りつく。

薄い踏み跡だがまばらな林なので、あまり気にせず上部をめざすことができる。被線の上には尾根が集まり、複雑な地形なので下山時のことを考えて尾根筋を

のなかを登っていく。沢沿いに急登が続くがここは我慢のしどころで、やがてササをかきわけて分岐に到達する。ほんの少しだから道を右にとり、弘法の池に寄っていきこう。水溜まりのようだが濡れることもない神秘的な池である。標高を考慮すればめずらしい存在だと思う。学術的には奥内では氷ノ山の古生層が有名だが、いつも水面があるわけではない。

元の分岐に戻り、直進すればわずかで山頂に着く。北側と西側はいまひとつだが、東側と南側はさきぎるものがない眺望が待っている。明るいササ原の山頂で弁当を広げるのもってこいである。兵庫県の標高ベストテンに入るというのに、この静寂が不思議に思える。

展望を楽しんだら下山にかかろう。東へ被線上をたどれば無数の小屋があり、林道がすぐそこまで来ている。単調なジグザグ道をくだると広い林道に出て、左折すれば上千町の道標のある分岐に着く。このあたりは人里とはいえず水が澄みきっている。春はドウダンツツジ、秋はリンゴ畑や各所に植えられているコスモスなど見どころが多い。春の山里の風情を楽しむながら駐車地点に戻ろう。

笠杉山頂にて



よく見ておきたい。さらに奥へ進み、やぶのなかの山頂に到達する。前述の記事ではJR播但線新井駅からタクシーを利用し、奥田路の集落から入山するもので、今回のルートとは反対の北側から登頂しているが、どちらにしても地形図と磁石は必携であり、よく地形を読む必要があると思う。周囲の展望は望めないが、静まり返った

△コースタイム▽

駐車地点(1時間30分) 笠杉山

駐車地点(1時間20分) 千町ヶ峰

△地形図▽2万5千1:1種子畑

△交通▽

バス路線からが奥深く、マイカー利用の入山が便利

△参考▽

福地溪谷休養センター TEL0790

(74) 1616で密着可。あまごの放流

釣り場もあり、下山時に立ち寄るのもよい。

観光バスなら 確実第一の 太陽観光開発(株)へ!!



- ・小型 (20人・24人)
- ・中型 (28人乗り)
- ・中2階 (45人乗り)
- ・大型 (55人・60人)
- いずれもサロンカーからアラックスまで

スキーバスもあります

〒578-0971 東大阪市湊池本町1-20 オカダビル4F  
電話 06(6745) 3811・FAX 06(6745) 3863  
夜間・電話 06(6242) 2371・FAX 06(6242) 2372

残雪を利用して登る

西ノ水と蠅帽子嶺

中級コース(★★★) 西尾 寿一

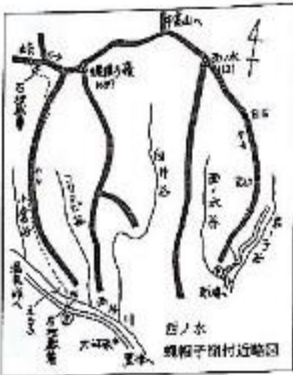
残雪期には、奥美濃(岐阜県北部)の福井県に接する山岳地帯... 残雪期には、奥美濃(岐阜県北部)の福井県に接する山岳地帯... 残雪期には、奥美濃(岐阜県北部)の福井県に接する山岳地帯...

今回報介するのは、奥美濃のど真ん中に位置する二山である。両山とも古い峠越道があったり、新しく切り開き... 今回報介するのは、奥美濃のど真ん中に位置する二山である。両山とも古い峠越道があったり、新しく切り開き...

フナの巨木の間を突に気分よく登行できる。頂上を目前にする頃、能郷白山や蛇ヶ岳などが視野一杯に飛び込んでくる。奥美濃のハイライトである。これだから残雪期の登山はやめられない。すぐ隣の能郷白山は堂々のピラミッドを見せるし、左門岳は深く樹林のなかに静まっている。下山は登路を引き返す。所要時間は下部のやぶ次第ながら平均4〜5時間である。

蠅帽子嶺(△1037m)

黒津から西谷川に沿って大河原(冬期離村)へ行くと、村人が家廻りの点検に忙しくしている。やがて戻る日のための備えなのだろう。大河原にはすでにフナ



で、これを残雪を利用して苦勞なしで登ろうとするものである。ただし雪の状態を判断するには微妙なタイミングを必要とする。それは二つある。その一つは道路状況である。能郷から大河原に至る道は冬期閉鎖される。4月下旬でないとならないが、その頃には山の雪は少な過ぎる。

これをクリアするには東谷川の越田から大白山の北を越えて越波に至り、黒津を経て大河原、という大廻を余儀なくされる。越波・黒津の生活道路で、集落の生命線となっているこのルートは、4月上旬でも確実に通れる。

その二つめは雪のコンディションである。雪量は毎年変化するので因るが、近くのスキー場情報が参考となる。雪の多い年で気温の低い日が最高で、逆は難波する。そのタイミングの判断が登山の成否を決する。

西ノ水(△1131m)

越波から岩ノ子谷の林道に入り、西ノ水谷合に車を置く。登路は尾根の先端でなく岩ノ子谷を3分程歩くとヒモが枝にあるので取りつく。始めからすこい急

ノトウが開いて春を告げているはずだ。村からわずかに走ると「道法師越」の標識があり、広い台地になっている。車を置き対岸へ渡る場所なのだが、水量次第で不可能な場合もある。少し上流へ行くと堰堤がある。少し長いが浅いので靴をぬいで渡る。身を切るような冷たさである。登る時間は早朝に限る。日が昇ると雪解け水が多くなるので不可。

渡った対岸から正規のルートに戻るため、そのまま左岸をトラバースし地蔵尊に出てもよいが、意を決して相当気味ながら上流をトラバースしている峠道に直登を仕掛けてもよい。

地形図には尾根上に道があるが、実際は西側をトラバースしている(上部は真となる)。

立派な道に出てホッととし、ひと休みとなる。谷川の対岸高く能郷白山が堂々たる姿で立ちほだかっている。フナの落ち葉が敷きつめられた峠道は、深山というより晩秋の里山のような趣すら感じさせる。

気分よく道を行くとジグザグを切り北へ向かう尾根にのる。この付近も立派なフナの巨木がたまらない。フナの小枝越

蠅帽子嶺の登り(後方 左能郷白山、右越山)



登でアゴを出しそうになるが、次第にゆるやかになり、820ピークに着く。樹林の間には付近の興味津々の山々が垣間見えて気分を立て直す。いったん裾野にくだり再び同等のピークに登り着く。ここからは残雪が豊かになって雪上を行くようになる。後はほとんど高度を上げるだけである。尾根が西へ曲がる頃には雪が固く締り、

しに越山が立派だ。道はやや細くなり、尾根の東側を捲くころ雪が出てくる。やがて尾根の西に転じ峠に向かってトラバースするようにになると雪山の技術が若干必要となる。雪が道をかくしているのでキックステップで登る。アイゼンを着けるほどではない。先頭が足跡をつければ後続はそれほどの苦労はない。

峠の地蔵尊は雪の下である。ひと息いれて山頂をめざすが、雪量次第で苦勞が左右される。普通の状態ならよく踏った雪の上を突に快速に登高して行けるが、少ない時はひどいものだ。

山頂に登った時の喜びは西ノ水同様舌につくし難い。

下山は、峠の中間から尾根を直接くだって道に出てもよい。奥美濃の良さを味わいながら快速に往路をたどり、末路の地蔵尊までくだると再び渡河の問題が控えている。先の堰堤まで行けば安全に渡れるので、冒険はやめたほうがよいだろう。登りも時間、下りも時間が標準である。

△コースタイム▽文中を参照 △地形図▽5万能郷白山







塔の森六角層塔

えられている。「日原村史」(大和の巻)。  
石塔の横には楠木大神の石碑が立ち、鳥居、小屋などもある。

先程の小嵐の所に戻る。下り道があり、少したると小さな池の横に祠がある場所に出る。その下の道は荒れているので引き返し、国見山への縦走路を道標に従って進むと鞍馬に出る。直進して登っていくとクマザサにおおわれた道が縦走路で貫

色の目印がある。左へ続く明瞭な道は尾根を乗っ越して急な下りとなり、池の手前まで右に折れて、ゴルフ場内の通路を経て、別所から七回峠(七回峠)や福住方面へ出る時に利用できる。

縦走路を上ると8等三角点「長谷」に出る。点のつどいの上田伴忠氏の設置したプレートがある。展望は全くない。

「日原村史」はここを「塔の森」と呼んでいる。いったんくたつて登り返すと右からの尾根道と合流している。左へ100mほど進むと境界杭があり、左にゴルフ場の駐車場に通じる細い道がササに隠されながら踏み跡を残している。下方に倒木があってやや歩きにくい。利用は可能であり、別所方面に出られる。

縦走路をたどると倒木の箇所が出てくる。分岐点に来ると、道標があり、左にそれてすぐ右へ進むとよい。分岐点で右へ続く矢田原町への道は最近倒木などの影響で利用が途絶えているようだ。隣々谷への下り道もイバラが繁茂し、険しい。分岐点から左方にあたる別所への道も猛烈なササにおおわれて通行不能になっている(道形は明瞭である)。  
ほどなく「奈良市のエベレスト」(チャ

モランで)国見山山頂も「そこ」と記したプレートが現れ、気持ちのよいクマザサの道を分ける。手作りの展望台のある国見山の山頂に着く。北東側と西側の展望が開けていて爽快な気分が満喫できる。昭和40年代頃には360度の展望が楽しめたようだが、最近植木が南北方向を遮るようになっていた。展望台には椅子が設けてあるが、はたして強度はいかがなものだろうか。680mの標高は生駒山よりも38m高いということになる。

山頂から少しくだると林道に出る。ほどなく約650mのピークに着く。2万5千分の1の地形図に示された直進する尾根の道は、倒木のオンパレードになっていて非常に歩きにくい。通行はできる。ここで出会った男性は何度も来ているらしく、倒木の道を天向のように通過していく姿が印象的であった。急なくだりとなり、やがて左手から古道が合流する(古道は南方の途中でブッシュとなり通行困難)。左右に茶畑を見ながらくたつていくと犬を連れて人とすれちがった。「どちらから」と訊かれ、「国見山から。倒木が多くて」と答えると「反対側から

の道がありますよ」と言われた。塔の森からの道のことらしい。五つ辻に至り、右にくだって矢田原口バス停に着く(五つ辻で直進してもよい)。

約650mのピークから、倒木くぐりやまたぎ越しを避けたい場合は、北東方面にのびる尾根伝いの林道をたどるとよい。鞍馬に出ると尾根道は通れなくなり、左右に道が取れる。左へくだらう。急坂の途中の枝道はどちらをとってもすぐ合流している。この下でキノコとりに来たという二人連れに出会った。「よく知らないで登ってきたのだが、この先はどこに出るのですか」と訊ねられた。「国見山です」と教えると怪訝な表情。「その先は塔の森に出ます」と付け加えるところや



泥かけ地蔵(別所の辻)

と納得していた。国見山の一般的知名度を測るのではないだろうか。

さて、左に谷を見ながらくたつていくと、ほどなく春日宮神社のすぐ上に出る。左において、拵りやすい危険な石段はパスして車道をたどり、矢田原口バス停に着く。

縦走コースだけでは物足りない場合、清水俊明「関西右仏めぐり」(創元社、1997年)の「日原橋田から福住道」に紹介されている別所から七回峠、福住町方面の石仏を眺めるのもよい(地図のコース表示は不正確)。塔の森の石塔を見てからヤマトカントリーゴルフ場への枝道(矢田原か所を案内)をくたつと、県道福住・矢田原線に出会う。

丁字路が別所の辻で、土地の人が泥かけ地蔵と呼ぶ双仏石がある。像高88cmの阿彌陀仏(右)と地藏菩薩(左)が浮彫りされている。南北朝末期の明德元年(1390)の年号があり、双仏石では最も最大という。塔は石仏に泥をかけて安置を願うという庶民信仰からきている。右の像に泥をかけて祈れば男の子、左の像だと女の子に恵まれるという(清水俊明「大和の石仏」創元社、昭和40年)。

辻から南に向かい、右折すると永照寺上之坊があり、境内墓地に室町時代の石塔が残る。西へゆるやかな道を進むと七回峠に着く。ここには鎌倉時代中期の建長五年(1253)造立の地蔵行仏(ワナトリ地蔵)がある。像高148cmの立像で、大胸で爽快な面相、充実した体の肉付けなど、迫力に満ちた作風がすばらしい。

七回峠は昭和初期まではよく利用され、昭和40年代頃でも中畑町にくたつたが、現在では地名の由来を示す七曲がりの道である西側の通行は途絶えている。県道に戻り、下入田の鎌倉時代の石仏を見て、国道福住バス停から天竺駅に出られるが、ゴルフ場から矢田原口へ戻るコースを考えるとよいだろう。  
(平成11年10月10日・31日歩く)

- △コースタイム▽
- 田原橋田バス停(55分) 日吉神社(15分)
- 塔の森石塔(30分) 国見山山頂(40分)
- 春日宮神社(20分) 矢田原口バス停
- 塔の森石塔(25分) 別所の辻(15分) 七回峠
- △地形図▽2万5千1大和白山



# せせらぎ

題字・小林政雄三

(山形 明)

5月2日 鳥取県高ヶ丘で  
山に登って  
林の中でクツしたッ  
運りのブナやナラの木が  
上からオレを見下ろして  
おまえ、山へ何しに来たッ  
と云っていた。  
7月24日  
日の暮れ時に  
ひなくれ男が  
日名倉山に登ったッ  
ひなくれカラスがやってきて  
ひなくれるなッ  
と云って帰っていった。  
8月31日 北ア穂岳で  
山はしんどい  
山はこわいところだ  
山はいろいろと大変だ  
でもオレは山が好きだ。

11月某日、本誌15号(翌年5・6月号)掲載の飯沢次郎一氏著「コースガイド『太平山』」を手に飯沢町宿野を山登(山登センター)行きならすの神バス停まで乗車でき、30分の車道歩きが省略可能。ガイドの記述通りに歩いた。  
一番目の炭焼きの釜跡(飯沢流の)を右側に確認したあと、しばらくは北へ行ったが、それ以降山道は右側にはなく、反対の左側(西方向)へくだった。周遊を約半時間強かけて、「右側に向けて鳥山の稜線にある」山道を歩いたが、どうして

も見つけられなかった。  
山頂に近いので、やぶを漕いでいけば、登頂できると思っただが、知りたパス便の都合で時間がかかってしまったので、不本意ながら、もとの道をもどり帰宅した。  
地元の人には知られていない山のように、この道は割尾山へ行くのには使われていたようだとこの話も聞かされた。  
このガイドは、5年前に掲載されたものであり、すでに状況は変わっているのかも。または、小生の勘違いか間違いにによるものかも知れません。ご存知の方がいましたら、ご教示ください。よろしくお願いいたします。  
(青葉孝次)

汗をたっぷり流せる温泉 昔ヶ崎半のシラブシヤブ 日本海の鮮魚と山の幸 ハイカーの宿 ナガサキロッジ 〒949-1810 新庄其中 新庄郡妙高町高野の平温泉 0255-1961226	高山の花 温泉の花 妙高山と大町山 百名山を二つ登れる山小屋 黒沢池ヒュッテ 〒949-1210 新庄郡中津川町妙高温泉 池の平温泉 ナガサキロッジ 0255-1961226	次期登山会 会路も敷道 10名以内マイクロボスで送迎 新根権石温泉 福 島 館 〒950-0883 神代川温泉 新根権石町山崎1-3-9 0450-41904	「伊豆の前半」の宿 トレッキング 宿下 湯川川の温泉 湯ヶ野荘 湯ヶ野荘 〒949-0400 新庄中津川町 〒949-0400 新庄中津川町 0255-1961226
---	--	---	--

に囲まれた静かな山頂に到着。  
三峰山・住坂山・権塚などが樹  
間に覗いていた。  
帰路、世谷にくる途中で、  
往きと違う道に入ってしまった。  
テープを拾って樹林の急斜面を  
くだると、野谷に出たので、少  
し谷をくだると、朝霞した所に  
入ることができた。どうやら、  
古くからある道のほうをくだっ  
てきたらしい。  
登りよりも下りのほうが速い  
やすいことを、今さらながらに  
感じたが、野谷の渓谷はと上部  
自然林の良さが再現できるコー  
スだった。  
(林道終点(2時間半) 述岳山  
頂(2時間) 林道終点 林道は  
車道通行可能だが、林道関係者  
専用道のようなものである。歩くに際  
しては45分位) (森木伸人)

分酒れていて、下見の際には半  
分水交していたという休憩所も  
完全に使用できた。  
飯沼泉ではこの鶴山を始めと  
する低山・里山を公園化してい  
るので、道は整備され急勾配の  
箇所には階段が設けられてい  
る。  
散り残った紅葉がむしる感時  
上りもひとときわづかに常緑樹  
の間から覗き出ている。標高4  
000に足らずの鶴山の頂上から  
の眺望は絶景とまではいかに  
が、南西方向にはやさしくて、  
こんもりとした緑の三上山が  
浮かび、一昨年未だ歩いた太郎  
坊山と併せて、万葉の世界を感  
ばせてくれた。  
尾根道は早い着衣にあおむ  
れ、静かな木洩れ日があり、私  
の最も好きな朝秋から初冬の低  
山歩きの醍醐味が満ちてきた。  
下山後は、往時の中山道の跡  
宿筋に藤原部と頼田女守ゆか  
りの神社を拝し、義経が関州  
下りの途次に元服した所と伝え  
る池をも訪ねた。入道りの全く  
ない田舎道を、湖を越えて間も  
なくやってくる季節を告げた風  
を味わって藤原駅に到着、無事

解散した。  
(笠野夢明)  
99年12月16日、雪の谷波山華  
蔵寺の本堂の前に立ち結願の報  
告をしている。  
初詣でで鶴ヶ野山を歩いた  
のは1月1日。それから約1年  
が過ぎ、夏40日を要していた。  
まれにみる残雪や、歩道のない  
道路で身の危険を感じ少々閉口  
したが、新しい体験と出会いが  
この旅をより多いものにしてく  
れたと思う。  
旅人が往來した「社」から  
「むら」をつなぐ池札道の集落  
には個性があり、人々の生活の  
匂いがある。早朝、通学の子ど  
もたちと交す「おはよう」の元  
気なあいさつ。目と目で交す軽  
い会釈を旅人に送ってくれる空  
かきがある。歴史が育んできた  
「町」があり人を思いやる会話  
があったのは、古い町並の残る  
温泉街であった。  
社会の進化で「むら」が「街」  
になった繁華街の雑踏は、便利  
さを求めるあまり、スピードに  
多くを置き旅人と交わる場はな  
い。  
湯野やツミを目にする後夜と

四葉旗の女子会 温泉のハイイク 上野川・湯野川へ 冬はスキー けやき祭り けやき山荘 湯野温泉 湯ヶ野荘 〒949-0400 新庄中津川町 湯野温泉 湯ヶ野荘 0255-1961226	をわやか温泉 鶴田温泉 山吹の湯 湯田温泉(温泉) 日野 温泉 旅館 〒949-0400 新庄中津川町 湯野温泉 湯ヶ野荘 0255-1961226	湯野温泉 湯ヶ野荘 〒949-0400 新庄中津川町 湯野温泉 湯ヶ野荘 0255-1961226	ハイキングにノーストーン 温泉の進化で「むら」が「街」 になった繁華街の雑踏は、便利 さを求めるあまり、スピードに 多くを置き旅人と交わる場はな い。 湯野やツミを目にする後夜と
--	--	--	---

した機会を人間性豊かな街に回帰する時がポチポチ来たのを今回の後歩の旅で感じとったのであった。(須藤 輝)

昨年の阪道、私の知人はわずか2ヶ月余りの入院生活の後、引越で天賦しました。私が後相テア病棟に見舞ったときには苦しそうな表情でもかすれ、その翌日に旅立ってしまったので

彼は仕事を通して知り合い、ほぼ20年来の付き合いでした。社会関係の仕事は、お互いの人間観などに共感できなければなかなか共同することは難しいのですが、彼は多くの点で価値観を共有できる、そんな数少ない仲間の人でした。

私生活の上でも距離が近くなっただけ、若いときから毎夏日本アルプスを歩いてきた彼の「山の話」を聞く機会はしほしばあったのですが、当時の私には別世界のことではありませんでした。

やがて、人生に二回目のコペルニクスの転換が訪れ、自然界への関心から山というものに接

近した私は、彼のガイドにより美濃の雲ヶ岳を登り、40歳から山歩も始めたのです。様々な事情があったのでしようが、彼が私の告知を受けたとき、病状はすでに末期に入っていました。激しい痛みとの間に明け暮れるしかない毎日に、心の余裕を得ることができなかつたからでしょうか、彼は自分の身の上を友人へ知らせることを躊躇したようでした。

人生の最期を悔りながら、生きてきた歲月をふり返り、人生の舞台の幕引きをする準備さえままならなかった彼の心情を思うと、無念というしかありません。せめて、死に向い合った彼の心の中に、最後まで鮮やかに響え続けた山の名を知りたかつた、と思うのです。(齋藤守康)

本誌9号(99年3・4月)を書店で見かけて初めて購入した理由のひとつは、パスの時刻表が掲載されていたことでした。その後、「登山・ハイキング・バス時刻表 近畿版」(書苑新社)が発売されて、すいぶんと死ねるになりました。

2000年は「鈴鹿白山」を中心にして、1・3月に御池岳で雪と遊び、4月と10月の2回は自然探査山行を行います。他のいすれの山行でも、ただ歩くだけではなく自然観察を主眼においた説明を織り交ぜたいと思っております。

自然探査山行の9月・10月の参加者が写真を持ち寄って一冊のアルバムを作り、参加者全員に頒布しました。被写体は期せずして同じものが多くなりましたが、アングルとかカメラによる違いが出ておもしろいものになりました。一枚一枚の多い方の費用はかさみますが、コピーで済ますことにより軽減でき、個人のアルバムよりもおもしろいものになりそうです。再咲春花の季節になりました。作りたいたいと思っております。(山田明男)

名古屋から電車での日帰りの山1日0コースをめざしてリーダーを引き受けました。1月4日の鈴鹿・入道・岳で0コースを教えました。始めた頃は申し込む者が1名という山が二重あ

その「99冬巻号」(98年11月発行)には、殊末に「50首順山名さくいん」があり、「明が田尾山」は「みよがたおやま」と掲載されています。筆者が本誌付録のガイドでふれておいたように「あけがたおやま」と誤心ではと発行所に連絡しましたところ「2000冬巻号」(99年10月発行)では修正されていました。

その後、山名さくいんにおける読み方などが気になっていたので総点検してみましたところ、次のような表記に気がつきました。「あきみだけ」「かしわはらやま」「かしわはらやま」「鳥田(からすだけ)」「まようじやかえしだけ」「くまのおやま」「くれかれのみね」「しろくぐらだけ」「ちようしがら」「つげのだけ」「つづみがたけ」「天笠山(てんじくやま)」「ほこかんやま」「はんざい」「へいせいやま」「ほだけだけ」「楢坂山」「みこやま」「やつがみね」「ゆづりはやま」「りゅうせんさん」「りゅうせんやま」「わたむかいやま」「和山」

これらの通例の説み方・書き方については「日本山名総覧」(白山書房)や山名辞典などで、それぞれ調べてみてください。なお、さくいんの「和山」はとうやら「天和山(てんわさん)」を指しているようです。いずれ改善されると思いますが、最近のガイドブックにおける山名の誤脱の影響があるように思えてなりません。「ミンサイス日本山名辞典」(三省堂)は、20万分の1地勢図記載の山名に限られており、もうそろそろ、2万5千分の1地形図に記載の山はもちろんのこと、地形図に記載のない山名をも収録する本格的な山名辞典の編纂が必要な時期に至っているのではないかと感じるところです。

山名の語源の考証や過去から現在までの呼称や別称などを吟めて、各方面で活躍している方々の研究成果の集約がなされることを期待しています。(柴田忠隆)

初めてから2年5ヶ月、会員の方に助けられながらやっています。もっと茶費にもっと頑張らなくてはと茶費をやらねばと思つて、下見と茶費の忙しい日々を送っています。(小出貞彦)

坂の道 千曲街道  
百八十七峰「観音原」  
ホテル  
白馬プランスシェ  
〒399-143000  
長野県北安曇郡白馬町いわたけ  
0266-172-44000

八ヶ岳自然探査の中心地  
50年秋の探査会を企画運営  
木の香の湯 新湯温泉 生火湯  
オーレン 小屋  
1泊2食付 8000円  
4月末・11月末開業  
〒399-10213  
長野県北安曇郡白馬町  
0266-2720 小坂勇夫

北八ヶ岳の登山基地 冬はスキー  
JR新幹線 北八ヶ岳登山口まで送迎します  
長野県 北八ヶ岳登山口  
〒399-10300  
長野市北山 長野県高橋町555  
13の1  
0266-67-2222

日本百名山の宿  
信州戸隠山  
森の宿めるへん  
高橋山・黒岳山登山口まで送迎  
クワン・コース(案内)  
〒398-14100  
長野県戸隠村水ヶ原  
0266-2541206

九州の最高峰・日本百名山  
宮之浦岳に「音の山」  
三久の安曇野登山口  
屋久島グリーンホテル  
〒999-14311  
長野県長野市屋久野  
0266-746-3322

日本唯一の女人山「音の山」大  
峰山(音の山)の登山口  
長野県 名水のある  
旅館 紀の国屋 八  
1泊2食付 7,000円から  
〒398-10431  
長野県長野市屋久野  
0266-746-3322

御在所登山に  
愛知市深谷駅まで  
山好きの仲間が集う宿  
宿務 朝 明 茶 屋  
〒399-14311  
長野県長野市屋久野  
0266-746-3322

サービスメニューを新刊する  
ときは、電話か往復ハガキで  
必ず予約を下さいませ  
ご予約のときに料金を確認して  
下さい。

**山行計画**  
(3・4月)

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してある場合は会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入願によって必ず出発の7日前までに到着するように入込み先に申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。費用のほかに参加名簿代その他の資料代実費をいただくことがあります。山行申し込み後参加できなくなった場合は必ず係に連絡してください。休日の悪い方、幼児と遊び入りはお断りします。例会の参加者全員に傷害保険がかけられています。出発直前の突発に保険料巨額50万円と救援対応費日額500円合計100万円(後日帰りの場合は20日あたり2000円)を支出していただきます。傷害保険特約内容は次の通りです。(安田火災海上保険会社と契約)

死亡・後遺障害保険金額 1000万円  
入会保険金 5000万円  
通院保険金 25000円  
日額 5000円  
保険の対象は集合時から解散時まで。事故があった場合は解散までに係に申し出て下さい。この保険に該当しないものは次の通りです。①ピッケル・6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行 ②スキー使用の山行 ③沢・岩・水小登はんを目的とした山行 ④宿泊場所内の事故 ⑤病死の場合(詳細は係まで)

(記入例)  
(往復ハガキを使用)

**山行申し込み書**

山行名 (正確に記入すること)  
期日  
住所 〒  
氏名  
会員番号  
(会員でない方は会員外と記入)  
電話番号  
生年月日  
緊急時の連絡先 TEL  
(山行中の連絡先を記入)

返信ハガキの宛名欄にご自分の住所氏名と「係」を記入してください。

**自然観察山行**

西三河・鳳来寺山と明神山 (中継向き)  
期日 3月4日(土)・5日(日)  
集合 (4日) JR岐阜駅8時50分  
コース (4日) 岐阜駅(バス)→鳳来寺バス停→本堂平→鳳来寺山→天狗ヶ原→東照宮→徳富温泉駅(バス)→湯谷温泉(泊)  
(5日) 湯谷温泉(バス)→乳石入口→乳石→明神山分岐→磐岩→6合目→明神山→乳石峠分岐→三ツ瀬山登山口→三ツ瀬山バス停(バス)→岐阜駅(解散)  
費用 約18000円(岐阜駅からの貸切バス・宿泊・保険・資料代等)  
地図 2万5千→三河大野・三河本郷・熊  
係 ①磐石守康  
②菅見守康  
申込み 〒504-1082  
各務原市蘇原村雨町1の19の5 磐石守康まで  
+定員20名(会員に限る)  
山岳仏教の荒々しい修験道を歩

く園栗寺山と、岩壁が連続する奥三河の絶景明神山をめざします。自然の絶景と写真撮影に伴う規則な歩き方が古に慣れない方がお加ください。雨天決行

地図 4万5千→三河大野・三河本郷・熊  
係 ①磐石守康  
②菅見守康  
申込み 〒504-1082  
各務原市蘇原村雨町1の19の5 磐石守康まで  
+定員20名(2月29日までは)  
新ハイキング関西支部合同山行384号の低山ながら高度にすぐれたピークです。地図読みとコンパスの使い方を学習しながら歩きます。初心者歓迎。+シルバートレコンパスと指定の地図を持参ください。雨天中止

**静岡・駒ヶ峰(一般向き)**

期日 3月5日(日) 日帰り  
集合 JR名古屋駅中央改札口  
8時30分(京都発5時20分)  
コース 名古屋駅(電車)→気貫駅→細江神社一峰ヶ峰→引佐峠→熊野平→西宮宮駅(電車)→名古屋駅(解散17時頃)  
費用 約3300円(名古屋から)  
地図 2万5千→気貫・二ヶ日係  
係 ①小山田春 ②朝倉利己  
申込み 〒610-0131  
城陽市寺田大野10の10  
新ハイキング関西まで  
近名湖の向こうに遠州灘を望みながらの早春陽だまりハイク。裾街も歩きます。雨天中止  
郵便で書と返す  
(3) 3月5日(日) 日帰り  
集合 JR名古屋駅中央改札口  
8時30分(京都発5時20分)  
コース 各果菜園(車)→コケルミ谷→カタクリ峠→丸山→奥の平→奥の谷→カタク

**リレーコケルミ谷(総解散)**

期日 3月5日(日) 日帰り  
集合 JR名古屋駅中央改札口  
8時30分(京都発5時20分)  
コース 各果菜園(車)→コケルミ谷→カタクリ峠→丸山→奥の平→奥の谷→カタク

**高槻市山西野一の19の20**

期日 3月11日(日) 日帰り  
集合 JR高槻駅9時00分  
コース 高槻駅→高槻寺→夢見ヶ丘→高槻寺→本板→板本駅(解散)  
費用 交通費各自  
地図 四文字「京都北山1」  
係 ①渡辺孝子 ②川藤亮彦  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大野10の10  
新ハイキング関西まで  
早春の東海自然歩道をのんびり歩きます。雨天中止

**④散策17時30分(後)**

期日 3月12日(日) 日帰り  
集合 大宮駅「かもしか庄」広  
コース かもしか庄(車)→清水平谷→林道広場→清水ノ頭→南野平→志の原→南野平→西宮宮駅(解散)  
費用 交通費各自  
地図 四文字「和左衛門・鎌ヶ







集合 JR安福山駅9時00分  
コース 安福山駅(バス) 小人谷  
峠(バス) 安福山駅(解散  
16時30分)

費用 約5000円(大塚から  
約2万5千円) 大塚  
①川田智俊 ②近江野実  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
村田智俊まで

江古園の自慢の花を再行しま  
す。今回は早春の花が楽しめます。  
昨秋行けなかった人は参加くださ  
い。小滝決行

北山ちよつと歩き  
大塚山から横川中堂 (中級向き)

期日 4月19日(日) 日帰り  
集合 京阪出町柳駅出町通り今  
出川通上ルバス停8時20  
分  
コース 出町柳駅(バス) 大塚一  
宮橋の滝 大塚山 仰木  
峠 横川中堂 横川峠  
登山口バス停(解散16時  
頃・バス) 京都市内

費用 約2000円(大塚から)  
地図 昭文社「京都北山」  
①京山堂  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
新ハイキング関西まで

右にコブシ 左に琵琶湖を眺め  
てのんびりと歩きます。雨天中止

平白水環ハイキング  
比叡・美原から権現山 (一般向き)

期日 4月19日(日) 日帰り  
集合 JR京都駅新美原のりば  
7時32分発に乗車  
コース 京都駅(電車) 和邇駅  
(バス) 聖原一前山一  
ホナケ山 小女陣峠 小  
女陣ヶ池 小女陣峠 美  
原池 蓮葉池(解散)  
費用 交通費各日  
地図 昭文社「比叡山系」  
申込み ①徳次次男 ②青木一雄  
〒569-1133  
高槻市川西町1の18の20  
湯浅次男まで

30分  
コース (22日) 大津駅(バス)  
スーパール林道入口(3時  
開散策) 白山一里野荘  
(23日) 一里野荘(バス)  
オ山一里野荘(入浴・  
昼食後バス) 大津駅(解  
散16時頃)

費用 約20000円(貸切バ  
ス・宿泊代別)

地図 昭文社「白山」  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
新ハイキング関西まで  
\*定員40名(会費別)

アンコールが多いので、今年も  
行きます。今回はもう少し歩  
きます。プナオのカタクリも楽し  
みます。マイゼン旅館 雨天決行  
①鈴鹿西山 4  
②香取・関見岳(中級向き)  
期日 4月23日(日) 日帰り  
集合 近鉄湯の山温泉駅9時25  
分  
コース 湯の山温泉駅(バス) 朝明  
一ノ木清水の庭園 貴船

平白水環ハイキング  
期日 4月20日(日) 日帰り  
集合 京阪出町柳駅新美原バスの  
りば8時40分  
コース 出町柳駅(バス) 広瀬原  
一ノ木清水の庭園 貴船 十  
ノ町(バス・船遊) 北大  
原駅(電車)

費用 交通費各日  
地図 昭文社「京都北山」  
申込み ①前中 ②後中  
〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
新ハイキング関西まで

松ヶ原峠からの縦走はイワウ  
チワなど季節の花を愛でながらの  
んびりと歩きましょう。雨天中止

自然観察山行40  
美濃・伊吹北尾根と岳伏山 (一般向き)  
期日 4月22日(日) 23日(日)  
1泊2日  
集合 (22日) JR大塚駅8時  
1泊2日  
コース (22日) 大塚駅(バス)

御膳峠 関見岳 大塚山  
一御膳峠 貴船ヶ原 湯  
又々さされた八雲(バス  
京都市内) (23日)  
城陽市寺田大塚10の10  
あいの森旅館まで

費用 約15000円(大塚駅  
から貸切バス・宿泊・保  
険代別)

白山スーパール林道とプナオ山  
(やや健脚向き)  
期日 4月22日(日) 23日(日)  
1泊2日  
集合 (22日) JR大津駅9時

近畿百名山を登る(第13回)  
湖北・横山岳と金蓋岳  
期日 4月29日(日) 30日(日)  
1泊2日  
集合 (29日) JR長浜駅9時  
10分

申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
新ハイキング関西まで

プナ林に甦まれた信仰の山。山  
頂よりくわった南に広がる湖  
があります。申し込みにハガキに  
集合駅を明記ください。雨天中止

期日 4月23日(日) 日帰り  
集合 河内線・旗本駅8時30  
分  
コース 旗本(電車) 寺尾峠 旗  
本 比叡社 伊吹山 比叡山  
けん原 高取山 比叡山  
比叡社 イワスライ  
ノチー後谷 旗本 旗本  
旗本(解散)

費用 交通費各日  
地図 昭文社「比叡山系」  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
新ハイキング関西まで  
\*マイカー山行  
古代ロマンを語る比叡社・イ  
ワス(横山)からのすばらしい

期日 4月29日(日) 30日(日)  
1泊2日  
集合 (29日) JR長浜駅9時  
10分

コース (29日) 長浜駅(バス)  
杉野小学校前 白倉登山  
口 五雲子の滝 横山 旗  
本 旗本 コスチヤ谷 杉  
野小学校前(バス) 須賀  
谷温泉(20)

費用 約20000円(大塚か  
ら電車・バス・宿泊代別  
約2万5千円) 大塚から  
近  
江川合・虎御山  
申込み 〒610-0121  
城陽市寺田大塚10の10  
村田智俊まで

近畿百名山を登る(第13回)  
湖北・横山岳と金蓋岳  
期日 4月29日(日) 30日(日)  
1泊2日  
集合 (29日) JR長浜駅9時  
10分





14・20(連) 飯坂14・30(解散)  
海の見えるピークや頂上からは

高尾山・三峰山・栗の木岳・阿ヶ岳・尾ヶ岳・大台などの山がはっきりと見えて感動。積み重ねる落る葉の上を歩いて、隣の谷コースを下山した。

(参加者) 桐山照彦 塚 文子 森 時代 小堀出男 河本孝子 和田四郎 ○新町まで

◎尾崎美五 (計8名)

三河・石巻山と宇連山 (自給給山行記)

11月27日(土) 28日(日) 1泊2日

(27日) 明け、JR飯沼駅前集合8・50→9・00(バス)石巻山登山口  
バス停11・00→登山口11・10→石巻山登山口12・00→石巻山12・20(昼食)13・10→大沼湖畔14・30→多米峠15・30→16・15→多米トンネル(バス)湯沢温泉18・40(宿)  
(28日) 朝、湯沢温泉集合6・30(バス)愛知野史の森駐車場6・45→尾尾坂 西尾橋駅前7・25(バス)北尾橋ジャンクション9・25→宇連山10・10→北尾橋ジャンクション10・45(昼食)11・25→北尾橋4.4分岐12・00→林道集合12・30→泉民の森駐車場13・

25(50(バス) 崎野車16・40(解散)  
石巻山からの雨で、多米峠からの早土山の眺望を羨し、イスマツギ峠などで密着のすばらしさに感動。2日目は、愛知野史の森南尾橋から西尾坂、北尾橋と急登し、崖をいずり山へと歩きました。

(参加者) 尾崎明 石田真由美 近江秀子 全藤孝子 草野智恵子 高橋雅子 中村啓香 鈴木天代子 泉山春子 橋爪恵子 砂原進英子 湯原昌子 三浦孝子 宮本孝幸 宮本悦子 湯澤康夫 ○狩野史彦 ◎菅見空康 (計10名)

甲賀・油尾山から那須ヶ原山 (週末ハイキング)

12月4日(日) 晴れ

JR油日駅集合9・05→10・10油日神社9・30→40→林道終点登山口10・20→30→油日山11・00→11・30(国産)11・40→那須ヶ原山12・50(昼食)14・00→坂、峠道山台集14・50→大原ダム15・20→25→栗野寺16・00→20→油日駅16・50(解散)  
昨秋の台風で倒木だらけの林道を縦走路は急ピッチで整備が進んでいた。ただ、那須ヶ原山から栗

野砂防ダムへの下山道は、植栽の倒木を整理した工事で完全に直っており、大原ダムへ変更した。

(参加者) 中井孝子 古部隆廣 山崎邦彦 岡 彰 佐野景一 山井邦彦 松村建子 山本孝子 今井武司 三井誠一 飯田孝子 飯田鶴子 奥田隆夫 松上美代子 上田公子 野瀬利明 船越まよ子 山崎隆夫 尾花節子 竹内孝久子 山本悦子 藤井洋子 小松誠信 山本悦子 三井誠一 前川和佳子 藤原昌子 山本悦子 前川千夜子 前川久枝 中村啓香 加藤由紀子 栗原寛子 上田正子 藤原美英子 城月清幸 若松孝子 乙庄健雄 加藤正彦 松田正正 野田美登子 藤井孝子 榎本恭久 安田文美江 別定探夫 三野 旭 川上善代子 鈴木天代子 ○加藤空彦 ◎狩野史彦 (計10名)

ヒキノ・旭山・峠 (峠道を歩く記)

12月5日(日) ◎曇り 明

12月5日(日) ◎曇り 明  
\*雨天のため中止しました。  
翌日・天尾登山  
12月5日(日) ◎村田哲俊  
\*雨天のため中止しました。

葛城・電線峠から二上山 (平日本塚ハイキング)

12月6日(日) 晴れ

近鉄四河原駅集合9・00→10→尾崎峠登山口9・30→クイーンズ尾崎峠10・10→二上山登山口10・15→尾崎の背11・45→雄岳(昼食)13・25→岩手寺13・50→車道→当麻寺14・30→当麻寺(バス)50(解散)  
虫籠峠の古道を歩くと、雄岳ではのんびりと過ごしました。  
(参加者) 本橋忠夫 草野智恵子 木村 豊 妹尾正 榎本哲三郎 藤原出男 辻 富子 藤 美穂子 近江富雄 中村啓香 木村天代子 中村英雄 鈴木孝子 小林伊津子 木村太郎 買田久子 千巻千枝子 岡本義雄 野田幹夫 野田美登子 南山 徹 小西勝雄 若木いずみ 白根孝子 辻 行子 久世美穂子 古橋孝次 高木 富 井川三子 橋本敏子 津村延夫 津村延夫 榎本孝子 約地桂子 榎本善治 榎本孝子 辻 隆二郎 若木大徳 寺本孝男 辻 隆二郎 若木孝子 竹田善長 或川みさお 貴倉孝和 藤原昌彦 ○青木一雄 ◎湯浅俊男 (計15名)

醍醐・上醍醐から高尾山 (平日本塚ハイキング)

12月15日(日) 晴れ

JR醍醐駅集合9・00→明徳院入口9・40→鉢形法皇門15(昼食)12・10→新和天宮13・10→高尾山13・30→保津峡14・30(解散)  
午後は清和天皇陵から高尾山へ歩き、水足の歴史と動物の歴史を比較し、のんびりと歩きました。  
明徳院(北山)とつと歩き(4)  
12月15日(日) 晴れ  
JR醍醐駅集合9・00→明徳院入口9・40→鉢形法皇門15(昼食)12・10→新和天宮13・10→高尾山13・30→保津峡14・30(解散)  
午後は清和天皇陵から高尾山へ歩き、水足の歴史と動物の歴史を比較し、のんびりと歩きました。

12月9日(日) 晴れ

京橋地下鉄熊旗集合8・45→三宮院山9・00→10→不動の滝9・35→45→池原観音堂10・10→30→五大堂10・25→30→檜隈峠10・45→高尾山分岐11・00→10→板の馬場11・40→牛尾観音11・50(昼食)12・35→高尾山13・10→30→三宮院14・35(解散)  
前中さんの都合が悪く「原目」のリーダー。雨マークにもかかわらず晴れました。紅葉も残っていてうれしい山行でした。(水見)

(参加者) 石濱幹子 中野孝一 古橋孝次 小林 稔 高岡信男 平田輝夫 瀧田 京 藤田健一 中田茂子 湯浅康夫 水島園一 速水 保 国見博子 藤井孝子 上飯坂辰 池 潤治 池 れい子 貴生孝子 城月清幸 和田尚樹 ○川上太史 ◎水見真博子 (計12名)

鈴鹿・上次巻倉(カンペガ平)

12月11日(日) ◎晴れ 晴れ

\*当日出勤が入り中止しました。  
湖北・清滝山  
12月12日(日) 晴れ  
JR相模駅集合10・15→25→清滝

神社・徳院10・45→11・00→尾根(橋子口)11・20→25→清滝山11・35(昼食)12・10→清滝集落12・50→北尾橋13・40→50→平原山14・00→柏原山14・20(解散)  
今回は史跡めぐりが入り、サブリーダーの巧みな解説にみな熱心に耳を傾けた。下山途中の落ち葉の積もった石ころ道の急坂は歩きが分からなく難を辿ったが、一人転倒して足を骨折された。(日記 緑・中尾美穂子)

(参加者) 飯田愛子 榎本孝雄 川島隆夫 古橋孝次 川上善代子 大木正秀 清水止三 鈴木孝子 藤原 邦 多賀久子 田中三重子 津田暢子 長次信美 中尾美穂子 野村明子 村三春代 藤岡美登子 森 時代 藤澤源子 村頭はる江 藤安美登子 三ツ井千穂子 ○朝倉和巳 ◎小山良香 ◎羽野あゆ (計12名)

那志岳の池と自然探検山行記 (初冬のおいでませ、初冠雪のため)

12月12日(日) 晴れ一時曇り

JR関ヶ原駅集合9・20→三坂池野原駅集合9・30(バス)コトダマ谷9・35→長谷水10・05→カウチー峠10・32→約10・55→池田川・

20→腰懸の谷11・35(昼食)13・45→元池14・05→鈴北岳14・20→掛時峠15・00→コタル谷15・45(バス)関ヶ原16・30(解散)  
雪が降りコノのガスの出が恐く、洗面がたてずは戻りました。が、一時間近くかけた焚き火でようやく食べられました。一面白い世界で、霧ももくれました。

(参加者) 本間 隆 榎本美登子 石濱幹子 西村文男 金藤幹子 合井武司 小松志隆 加納由紀子 山本久雄 岩下祐夫 栗本俊夫 島田昌吾 松本治三 山村壽男 水谷俊夫 丹下由子 伊藤孝久雄 原田伸子 小林 夫 伊藤美英子 原光一 原 孝子 山野善徳江 山田彩子 藤部 純 ○玉田芳彦 ◎山田明男 (計12名)

栗作・瓜ヶ城と福徳温泉

12月12日(日) 晴れ

JR西明石駅集合9・25→(90)バス(大宮登山口)10・55→中国自然歩道12・12→30→瓜ヶ城13・05(昼食)13・35→岩場13・50→第2腰懸台14・30→瓜ヶ城13・15(バス)湯澤温泉(入浴)15・05→西明石駅19・15(解散)  
瓜ヶ城からのすばらしい眺め、

12月12日(日) 晴れ

